

---

# スズランとマイナス

式織 檻

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

スズランとマイナス

### 【コード】

N8166D

### 【作者名】

式織 檻

### 【あらすじ】

”歩くマイナス極” 鞘河亜紀雄と精霊スズランが織り成す、なさそうでありそうで、やっぱりなさそうなお話。

## プロローグ（前書き）

本作品は拙作「ESP部のとある登場」及び「殺し屋殺しの藁人形」のネタバレを多少含みますので、ご注意ください。（ただし、本作と前述の2作品は趣向が異なりますので、必ずしもこれらの作品を先に読むことをお勧めするものではありません）

## プロローグ

「ねえ、知ってる？ 実は精霊って、この世界に本当に実在するんだヨ」

などといきなり言って、即刻その言葉のすべてを信じてくれる人など、一般的な日本社会においては皆無である。

万に一つ、初めから全部を本気にしてくる人がいるかもしれないが、しかしその場合、むしろそんな人間の方が大多數的価値観からすればデンジャーな存在であり、そんな輩は残念ながらとても一般的な人だとは言えない。そのようなケースは例外中の例外であり、後悔しない友達付き合いをしたいのならば、もっと別の人を選択するべきである。

しかしだからと言って、普通の学校の普通の友人を相手に、真顔を作って前述のセリフなどを言おうもんなら、たいがいは

「何、それ？ どんなジョーク？」

などと、最初から冗談と決め付けられたり、

「何だ、昨夜寝つきが悪かったのか？」

などと、夢の話だと決め付けられたり、

「……何か悩みがあるなら、俺が相談に乗るぞ？」

などと、精神的病気の類を疑われたりするのがいいところだ。

真実だと言い張ろうもんならそれこそ奇人呼ばわりされかねないし、友人関係が危うくなるかもしれないし、もしかしたら大人から本気で心配される可能性だってある。一般人の枠組みの中で生きて行きたいと思っている人間にとって、どう転んでも想定外の未来しか待っていない。そのような未来を望まないのなら、冒頭のようなセリフは初めから口にしないのが吉である。

理由なのだ。

学業という名の一種の牢獄から開放され、安堵感が辺りを覆いつくす放課後の教室にて、帰り支度をしている最中に、隣の席のクラスメイトが、

「おとぎ話やら何やらだと、昔からあつちこつちで精霊なんつーもんが語り継がれてるけどさ、ここまでその例が多いってことは、実際にそんなもんがいるのかね？」

なんていう話題を突拍子もなく運んできた場合でも、亜紀雄は躊躇なく、

「あはは、そんなもんあるわけないでシヨ」

と笑い飛ばすようにしている。実は、彼の右隣わずか三

十センチ先に鎮座している、当高校の制服をまとった小麦色の散切り頭の女子生徒が、その精霊本人であるにも関わらず。

当の精霊たる少女 鞘河スズラン はというと、亜紀雄のその辺の心情を十分に理解しているので、自分の存在を否定するそんな会話にも、

「そうですよ」

と、他人事のように愛想笑いを浮かべている。できた精霊だと言っても異論はないだろう。

このスズランという精霊。この世界に降り立っている理由が理由だけに、亜紀雄とほんの数時間だけでも離れることを頑なによしとせず、無論亜紀雄も亜紀雄で高校をそう何日も休むわけにも行かないので、結果、スズランが学生として学校に通うことになったのである。

スズランには亜紀雄以外に身寄りはなく、また亜紀雄以外の誰かに身寄る意味も意義もないので、必然的に亜紀雄の衣食住すべてについて周ることになっている。彼らの級友達にしてみれば、亜紀雄を見れば必ずスズランも視界に入るし、スズランを視界に入れれば即ち亜紀雄の動向を眺めることにもなる。紐で繋がった飼い犬と飼

い主のようなものだ。どちらが飼い主なのかという疑問は置いておくとして。

しかも、スズランが精霊であるということは周囲には完全に伏せられていて、スズランが亜紀雄にやたら着いて回っているその本当の理由を知るものは、他に誰一人いない。それはつまり、傍から見ればその昼夜問わず行動を共にしている様は、ただのオシドリ関係にしか見えないということだ

「では、亜紀雄様。そろそろ帰りましょうか。帰りに夕飯の買い物をしたいのですが、メニューは何がよろしいですか？」

「……え？ あ、何でも……」

「そうですね。亜紀雄様は中華がお好きですから、チンジャオロースなどどうでしょう？ あ、亜紀雄様の嫌いなピーマンは、一応減らしておきますが、でも少しは食べないといけませんよ。好き嫌いはいけません」

「……え？ あ、ああ……」

「さ、行きましょう、亜紀雄様」

「わ、分かったから、あんまり腕を引つ張らないで、肘が変なところ」

「くそつ、亜紀雄っ！ 見せ付けんじゃねーっ！ くらえっ！  
彼女いない歴〃年齢パーンチッ！」

「いたあっ！」

現在、亜紀雄は級友に羨ましがられ疎まれるには十分と言っか十二分を過ぎるような状況に甘んじているのである。

## 第一話「朝」 その一

亜紀雄にとって、眠りから目覚める瞬間というのが、人生における唯一の至福のひと時である。

夢から目覚めたばかりの刹那。現実を現実と認識できずにいる一瞬の混乱。これが夢なのか現実なのか、分からなくなる。この意識の空白がこの上なく心地いい。何者にも変えがたいほどに……代えがたいほどに……換えがたいほどに……気持ちいい。掛け値なしに、これこそが至福である。

この心地よさは、現実が受け入れがたいほど大きくなる。

あの苦痛も、あの困難も、あの後悔も、あの絶望も、すべてが夢だったんじゃないか？ 幻だったんじゃないか？ 現実ではなかったんじゃないか？ そう思う。そう思っただけで済ませる。

そう思うことで、わずかばかり心が楽になる。

ぐるりと現実世界の自分の周辺を見回してみても、安心できることなど一つも見つからない。目に入るすべてのものが自分のことを敵視し、否定し、攻撃し、嘲り、籠絡しようと虎視眈々と観察している。恵まれていれば舌打ちされ、恵まれていなければここぞとばかりに叩かれる。被害妄想などではなく、経験則からそういう結論が導かれるのだ。そういう結論しか導かれないのだ。

輝かしい微笑の裏側で、毒づかれていたこと。

友情や愛情だと信じていたものが、完全なまやかしだったこと。

人一倍の好意で接してみたが、拒絶されたこと。

頑なに守っていた自尊心を、恐ろしいほどに踏みつけられたこと。

そんな経験は数え切れないほどある。数えるのが馬鹿馬鹿しくなつて数えていないだけだ。むしろ今まで十六年間を生きていて、そんな経験しかない。そんな経験しか思い出せない。それ以外の記憶

が、脳に刻まれていない。

すべてがすべてが、敵だった。

そんな環境に晒されて、一体どうやって生きる希望を見出せと言  
うのだろうか？ 偽善者が謳う気休めに似たキレイ事など、本当に  
無責任だと思つ。残念ながらこの世界は、自分が生き易いように  
できていない。なるようになってきたという、ただそれだけ。そ  
れだけでしかなく、それだけでしかない。自分を救うのは自分だけ  
自分が救うのは自分だけ。自分を慈しみ愛しむものなど何も無いの  
である。そんなもの、最初から存在していない。

あるいは現実だけでなく、眠りにについている最中だって同じだ。

現実と切り離されているはずのその時間でさえ、悪夢に苛まれる  
ことなど多々ある。現実が荒んでいればいるほど、それに比例して  
あるいは対数的に 夢さえも荒んでいってしまう。何の救い  
にもならない。夢は救いなどではないのだ。

だからこそ、だ。

だからこそ、亜紀雄は目覚める瞬間を至福と据えるのである。こ  
の一瞬だけ気持ち軽くなる。心が軽くなる。頭が軽くなる。この  
ひと時がなければ、自己などとうに崩壊していただろう。それほど  
かように、亜紀雄にとって重要な瞬間なのである。

だから、もう少しだけ、このままで

ガシャララーンッ

いきなり、耳をつんざくようなドラの音が鳴り響いた。

これは決して「ドラのような」ではなく、正真正銘のドラの音で  
ある。

日本国内の中流家庭が住むような家屋内でドラが鳴るなど通常は  
考えられないことであるが、しかし否定しようもなくこれはチャイ  
ニーズ・シンバル つまり、ドラの音であった。それを確認する  
のは、亜紀雄にとって造作もない。首を回して、部屋の入口の方に

目を向ければいいだけである。

そこには、右手首からドラの紐を垂らした、すでに制服に着替え終わっているスズランが立っており、

「亜紀雄様あ、朝ですよおー」

ガシャララーンツ

「う、うるさい！」

亜紀雄は飛び起きた。

「……く、何でドラなんか持ち出すんだ……！」

「だって、亜紀雄様、フライパンにオタマというコンボでは、なかなか起きないんですもの」

ガシャララーンツ

「わ、分かったから、もう鳴らすナ！」

耳を塞ぎながら声を張り上げる亜紀雄。

こんな朝っぱらから、しかも住宅街のど真ん中で大音量を奏するのは近所迷惑だろう。なんていうツッコミは、亜紀雄が昨日に済ませている。これに対するスズランの返しはというと、亜紀雄の知らぬ間に壁に防音シートを満遍なく貼ってあるのだそうだ。言われて見回してみると、確かに壁の色が少し違っていた。元々白かった表面が、前日よりもいくらかクリーム色がかっている。

だからいくらかき鳴らしても平気です。とスズランはにんまり笑顔で言ってきた。確かに感心するほどに用意がいいが、それよりも他に方法があったのではないかと。他に頑張ることがあったのではないかと。優先順位が間違ってるんじゃないのか？

亜紀雄の頭の中には、昨日もそして今現在も、そんな疑問が浮かんだ、浮かんでいる。しかし

「では、早く身支度してください。遅刻いたしますよ」

そう言っただけでスズランはドラを抱えたまま部屋を出て、たつたかと階下へ降りていってしまった。甲高い鐘の音に耳を塞ぐのに忙しく、亜紀雄は完全にツッコむタイミングを逃した。昨日の二の舞である。枕元の目覚ましを持ち上げると、七時ジャスト。もう十分くらい

寝ていても余裕なはずだ　　実際、一ヶ月前まで亜紀雄は七時十分にアラームを合わせていた　　が、すでに目は覚めてしまっている。今からもう一度布団にもぐったところでまどろむことは叶わないだろうし、もう一度ドラを鳴らされるのはご免だ。

亜紀雄はため息をつきながら立ち上がり、クローゼットを開いて制服を取り出した。

階段を降りてリビングに入ると、テーブルの上にはトーストとサラダ、コーンスープが並べられていた。

「あ、亜紀雄様。ようやく起きましたか」

入ってきた亜紀雄に気付いたスズランが、顔をこっちに向けながら言ってくる。

制服の上にエプロンといういでたち。冷蔵庫の下の部屋をのぞいている姿勢である。当然のごとく、もうその腕にはドラは掛かっていない。どこかにしまったのだろう。亜紀雄は、学校から帰ってきたら即刻そのドラを見つけ処分することを脳内のスケジュール帳の今日の予定に加えた。

しかし、そんな亜紀雄の脳内秘書の動向など知る由もないスズランは、相変わらずの無邪気な顔を浮かべながら冷蔵庫からヨーグルトを取り出し、ドアをぱたんと閉めて向き直った。そして、取り出したカップを亜紀雄の目の前、テーブルの上にコトンツと置く。

「さ、早く食べてくださいまし」

そう言いながら、亜紀雄の指定席たる椅子を引くスズラン。その動作に促されるように、

「あ、ああ……」

亜紀雄は座った。

トースト、ベーコンエッグ、サラダ、コーンスープと、亜紀雄の目の前には結構な質と量の朝食が並んでいる。一ヶ月前まではどうも考えられないものだった。あの頃は毎朝トーストを焼いてマー

ガリンを塗るだけ。栄養もへったくれもなく、ただ昼間で腹が持たばいいというだけだった。

ドラで起こされるのは勘弁だが、こういう利点もあることにはある。

はぐらかされたような気分になりながらも、幾分かの満足感を以って亜紀雄は朝食に手を伸ばした。そしてたどたどしくも、パンやレタスを口に運んでいく。

多様な料理、多彩な味覚。

食事一つでもこれほどまでの快感を味わうことが出来るのか、と亜紀雄が感心してしまうほどだった。「朝食は一日のエネルギー源である」なんていう文句は家庭科教師が鬱陶しいくらいに言っていたが、その真実味を改めて実感してしまう。口に入れるたびに脳が活発になっていくのが、亜紀雄自身にもよく分かった。

朝食を食べ終わると、時間は七時四十分。そろそろ家を出ないと遅刻だ。

亜紀雄は、

「……さ、そろそろ行くこつ」

と言いながら椅子から立ち上がった。そして隣の椅子の上に置いてある鞆を手に取りうとした時、

「あ、亜紀雄様。待つてください」

空いた皿をシンクへ運んでいたスズランが振り返る。

何で呼び止められたのか分からず、亜紀雄が棒立ちでつつ立っている、スズランは亜紀雄の目の前まで近づいてきて、

「ネクタイが曲がってますわよ」

と言つて首元に手を伸ばし、制服のネクタイをキュッキュと締め直した。

淀みないスズランの動作に、なすがままになる亜紀雄。

スズランの額を眼下数センチ先で眺めることになり、何とも歯がゆく気まずくなるが、首を押さえられているので思うように顔が動かせない。どうにもこうにもならず、亜紀雄が半ば困ったような

気分でスズランの絹のような髪を見つめていると、ほどなくして首から手が離れて、

「はい、できましたわ。さあ、でかけましょうか」

と、ポンツと胸元を手の平で叩かれた。そしてスズランは目を細め、新婚の新妻でもそこまでではできないだろうというくらいに、愛おしむような微笑を亜紀雄に向けてくる。

亜紀雄は、やけに眩しいその笑顔を直視できずに、

「……は、早く行こう」

ときごちなく言って、鞆を担いでそそくさとリビングから出て行った。

## 第一話「朝」 その二

スズランが請負っている役目というのは、亜紀雄の世話をすること、ただそれだけである。

何でも、亜紀雄の曾々々祖父にスズランが大変お世話になったそう。礼を尽くさねば返せないほどの恩。その恩を返すために、スズランはこの界に留まっっているのである。

それほど大事な恩ならば、本来恩を受けた本人に返すのが筋だろう。

しかし、それは三百年前の話。この三百年の間精霊界に縛られていたスズランは、つい一ヶ月前によくこの界に降りてくることができたのだが、本人が生きているわけもない。なので色々迷った挙句、その恩を受けた人の子孫たる鞆河亜紀雄のために身を粉にすることに決めたのである。

亜紀雄にとっては驚愕の惨事だった。

それはそうだろう。いきなり見ず知らずの女の子が玄関から尋ねてきて、

「初めまして。これからあなた様のお世話をさせていただきます」とお辞儀されて、驚かないわけがない。

亜紀雄は最初、スズランを新手の勧誘か押し売りか、もしくは詐欺の類かと考えた。そして当然のようにろくに相手もせず、返答も早々にボタンと扉を閉め切ったのである。ここまで冷たくすれば、どんな強引な売り込みも引き下がるはず。経験上、亜紀雄はそういう予測をもってそのような対応をしたのだった。

しかし、それは甘かった。

スズランのアタックは、犯罪のボーダーラインをまったく言うていいほど考えていないものだったのである。

玄関を閉め切っても窓を割って進入してきたし、一一〇番しようとしたら電話線を切られたし、携帯電話を取り出したら粉々に割ら

れたし、近所に助けを呼ぼうと叫ぼうとしたら猿ぐつわよろしく口にタオルを詰め込まれたし、走って逃げようとしたら両手両足を縛られたし、それでも暴れたら背中から電気ショックのようなものを当てられた。納得したわけではなくむしろ要求を拒もうもんなら殺されるんじゃないかという恐怖に負け、結局亜紀雄はスズランを家に置くことを了承したのであった。

後になってから、何であんな強引なことを、強盗歴四十年のプロでもこうはいかないだろうというくらいに手際よくやってのけることができたのか聞いてみたところ、

「いえ、まあ、いきなり見ず知らずの精霊が押しかけてくれば、普通の方は驚くでしょうし、亜紀雄様も例外ではないでしょう。私もきちんとその辺りの常識はわきまえておりますので、亜紀雄様があるような行動に出ることは十分予想できておりました。だからこそ私も私でそれに対する準備を万全にしていたに過ぎませぬ。全部当初の計画通りです」

と、スズランは困難なプロジェクトを如才なくやってのけた敏腕の女性プロデューサーのように微笑んできた。確かにあそこまで読みきっていたのならそれはそれで素晴らしいことではあるが、やはり頑張ることは他にもあつただろう、と亜紀雄が思ったことは言うまでもない。

スズランの人となり（精霊となり？）が分かってきた現在、今さら出て行ってくれと言う気にもなれず、また同じ目に会う可能性もなくもなかったため、結局スズランのお世話は継続中なのである。

では、スズランの言う「お世話」とは、具体的にどういったものなのか？

簡単に言えば、亜紀雄が快適に生活できるように働くことである。朝起こしたり、朝食や夕食を作ったり、掃除洗濯をしたり。それ以外にも何かないかと、常に亜紀雄の側を着いて回るのである。

だからこそ通学の電車にも、お供するように亜紀雄と一緒に

乗る。

亜紀雄とスズランは並んで座っている。

ロングシートの車両。その座席の中ほどに、二人は何をするでもなく収まっているのである。そして電車がゴトンツと揺れるたびに体が傾いて、二人の肩がぶつかり、その感触に慌ててスズランがさつと体制を正す、というようなことを繰り返している。まるで付き合い始めたばかりのカップルのような、この上なく初々しい風景。亜紀雄のクラスメイトが悔しがって地団駄を踏むようなシチュエーションである。

しかしながらそのツガイの片割れである亜紀雄は、隣のスズランよりも車両内の状況を気にしていた。

日本のどこでも見られるような一般的な車両であるが、しかし亜紀雄はこの上ない違和感を以って周囲を見回している。ためすがめず観察している。そしてゆっくりと口を開き、澄ました表情で隣に座っているスズランの方に顔を向けて、

「……あのさ、スズラン？ 気になってるんだけど……」

「は？ 何です、亜紀雄様？」

亜紀雄の方に向き直り、首をちょこんと傾けるスズラン。

亜紀雄はその口をやや突き出した表情に向かつて、

「いや、あのさ、今って朝の八時じゃん。それって、学生にとっては通学時間だし、社会人にとっても通勤時間なんだよネ」

「ええ、そうですね。大勢の方が眠そうな顔で歩いてらっしゃいます」

「そう。つまり、電車とかバスとかはさ、一日で一番混む時間だと言っても過言ではないんだ。通勤ラッシュなんて言葉もあるくらいだし」

「ええ、その言葉は聞いたことがあります」

「でさ。僕たちが乗ってるこの電車も例外じゃなくてサ。この路線の沿線には会社も学校も数え切れないほどあってさ、そこに属して

いる人の大多数がこの電車を利用するもんなんだ」

「そうですね、だからこそこの路線も成り立っているのでしょう」

「……ええと、つまりね。以上のことを踏まえた上で聞きたいんだけどさ」

亜紀雄はぐるっと車両内を見回し

「何でこの車両、僕たち以外に誰も乗ってないの？」

恐る恐るそんなことを聞いた。

「だって、おかしいでシヨ？ 一ヶ月前までは、僕もぎゅうぎゅうに押しつぶされながらこの電車に乗ってたんだヨ。背広とドアの間に挟まれながらさ。なのにこの一ヶ月、人ごみどころか人つ子一人いないよ、僕ら以外。ほら、見て、隣の車両。あそこでは見覚えのあるオシクラ饅頭が繰り広げられてるヨ。みんな苦しそうな顔で電車で揺られてル。なのに、どうして僕らはこんな余裕で座ってられるノ？ しかも ほら！ あのサラリーマンの人！ 何だか青ざめた顔でこっち見てるヨ！ 何であの人、あんな目で僕らを見るノ？ 何であんな顔してるノ？ 何でこっちの車両に移ってこないノ？」

「……そうですね。わざわざ自分の功績を説明するなど、家臣としては恥ずべき行為なのですが」

スズランはうつむき加減で、

「ですが、亜紀雄様が疑問に思うなら、お答えしないわけにはいきませんね。……ええと、ほら、見てください。あの入り口のところ。両脇にお札が貼ってありますでしょ？ あれにはですね、通った人間を識別する機能がついておりまして、あそこでこの車両に乗ったのが我々なのか、それ以外なのか、判断しているのです」

「……やっぱり君だったのか。………というか、判断してどうしたの？ それだけじゃ、他の人がこの車両を避ける理由には」

「亜紀雄様」

スズランは、亜紀雄の言葉を遮るように言ってきた。そして目を伏せて、ふるふると首を横に振って、

「……あなた様は、上に立つ者。我々を導く者。どうぞ前だけを見てお進みくださいまし。あなた様の先祖である隆久様も、それだけの風格を伴って一國をまとめてらっしゃったのですよ。あなた様も家臣のことなど気になさらず、ご自分と、そして国のことだけを考えて生きてくださいまし。私も、あなた様に危険がないように、あなた様が安全に生活できるように、日々最良の選択をしているに過ぎませぬ。だから、どうか私を信じてください。そしてどうぞ何も気にせずに、亜紀雄様の生活を送ってくださいまし」

「……い、いや。そう言われると逆に気になって」

と、スズランの真剣な眼差しにたじろぐ亜紀雄。その圧力に負けるように上体をそらし、隣に置いてあった鞆に腕をぶつけた時、

カラランツ

と、何かが床に落ちた音がした。

筆箱でもこぼれたのかと思って亜紀雄が振り返ると、床の上には携帯電話くらいの大きさの白い筐体　　いや、まごうことなき携帯電話の筐体であった。亜紀雄が一瞬その判断を迷ったのも無理はないだろう。その携帯は、まるで高熱で溶けたかのように形が崩れていて、まるで燃やされたかのように表面が焦げていて、まるでハンマーで叩かれたかのようにあちらこちらが欠けていて、まるで高圧をかけられたかのように外形が歪んでいて、まるで刃で斬られたかのように刀傷がついていて、まるで電気ショックでショートしたかのように黒い煙を吐いていた。

何、これ？

この疑問の答えに対していくらかの予見を持ちながら、亜紀雄は油が切れた機械のようにぎちぎちと首を回し、スズランの方を見る。

「……………」

「……………」

目が合ったまま、固まる二人。三拍ほどそうした後、スズランは

妖しいほどのやたら満面の笑みを亜紀雄に向けてきて、

「どうぞ、気にせず」

「いられるカーっ！」

とまあこんな風に、スズランは日々亜紀雄の世話をしている  
のである。

## 第二話「ランチタイム」

亜紀雄にとって、食事というのは他者の命を消費する作業としか思えない。

そこには肉食も草食も関係なく、ただただ動物なり植物なりの命をもち取り、それを自分に吸収するだけである。生きようとする他者の願望を摘み取って、自分のために吸収するのである。

つまり、他者を止めて自分を継続すること。

他者の生きようとするベクトルを遮って、それを自分のために還元するのである。他者をわざわざ止めて……留めて……停めて……富めるのである。

果たしてこの人生に、そこまでの意味があるのだろうか？

この鞘河亜紀雄の人生は、他者を踏み台にしてまで継続する価値があるものなのだろうか？ 他者の生きようとする意向を遮ってまで、この人生は続かせるべきものなのだろうか？ それに値するだけの人生を送っているだろうか？

常日頃、亜紀雄の中にはそんな疑問が巣食っている。

他者から奪ったエネルギーを使って、自分は一体何をしたのだろうか？ 何を生み出したのだろうか？ 何を獲たのだろうか？ 何を作り出したのだろうか？ これまでの半生を振り返ったところで、何も思い浮かばない、何一つ考えつかない。他者を踏み台にすることと等価のものなど、何一つ見つけた覚えはない。

だったら、なぜ自分は生きているのだろうか？

自分が一昨日、昨日、今日と生きている理由は？ 生きている目的は？ 生きている意味は？ 何もないんじゃないか？ 生きる意味なんてないんじゃないか？ もう、生きない方がいいんじゃないか？

なぜ自分は、わざわざ生きているのだろうか？

その答えは、実は分かっている。分かりきっている。多分、何と

なくなのだ。何となく死にたくないから、生きていだけなんだ。苦しみたくないから、痛いのが嫌だから、生きていだけなんだ。腹がすくから食事をするだけなんだ。そこに理由も目的も意味もないのだ。

何て自分勝手に、横暴で、無意味な存在なんだろう。

我ながら、本当にくだらない。こんな奴など、早く消えてしまった方が世界のためだ。早く消えてしまった方が、その分他の動物や植物が生きていけるはずだ。その方が世界にとって、すべてにとって価値のあることだろう。意味のあることだろう。これ以上ないほど理解できる。

だけど、やっぱり

くだらない存在であるからこそ、自分を止める勇気もないんだ。留められないんだ。停めることができないんだ。結局何となく、無意味に今日も生きていくんだ。

「……もう、考えるのも嫌になってきた」

憑き物を払うように首を振りながら、亜紀雄はハアとため息をついた。

「……いいさ、ダメ人間はダメ人間らしく、怠惰に延命するのサ。どうせそれしかできないんだから……」

周囲の誰にも聞こえないくらいのおおきな声でそんなことを言っていて、亜紀雄は机の脇にかかっている鞆の中に手をつ込んだ。数秒モゾモゾやった拳句にそこから取り出したのは、プラスチックのトレイ。上面には「弁当」と書かれた白い紙が輪ゴムで留められている。

これは、亜紀雄の昼食の弁当。今朝、駅前で買ってきたものである。

スズランが来てからの一ヶ月は、昼食もスズランお手製の弁当を持参していたのだが、今日は久しぶりに市販の弁当になった。実は昨夜、夕飯の支度中にスズランがおかずを焦がしてしまい、弁当用を買ってあった冷凍コロッケを夕飯として食べることになったので

ある。そんなわけで次の日の弁当の中身がなくなってしまい、あえなく本日は店の弁当を買ってくることになったのであった。

これについてスズランは申し訳なさそうな顔でしきりにぺこぺこしていたが、亜紀雄にしてみればこちらの方が元来のメニューであり、感覚的には前の状態に戻っただけなので別段気にしてはいなかった。スズランの弁当も美味ではあるが、たまには市販のものを食べるのもイレギュラーでいいだろう、くらいに思っている。

とりあえずこの空腹をどうかしよう。

そう思いながら、亜紀雄は紙のカバーを外し、中を覗いて

「あれっ？」

素つとん狂な声を上げた。そして目を丸くして弁当の中身を覗く。その表情には驚愕が浮かんでいる。亜紀雄がそうなるのも無理ないだろう。なぜならその弁当箱の中には

ご飯が半分しか入っていないのである。

いや、それだけならここまで驚かなかっただろう。元々あの弁当屋があこぎな商売をしている可能性だってあるし、店員が純粋に量を間違えた可能性だってある。しかし亜紀雄がここまで驚いたのは、つまりはそれだけに留まらずに、

すべてのメニューが半分　よくて三分の二程度。

エビフライさえ半分で切られていて、おまけに歯形までついている。

「………これは？」

高校入試で冥王星の軌道計算問題が出たくらいの呆然とした顔で、亜紀雄は手元の弁当を見下ろす。ためすがめす見回す。そしてゼンマイ仕掛けの人形のような動作でキリキリと首を回し、

「………ねえ、スズラン。僕の弁当がいつの間にか減ってるんだけど………？」

亜紀雄の隣の席で、すでに弁当を食べていたスズランに尋ねた。

スズランは箸をぴたりと止め、亜紀雄の方を向いて、

「……へ、亜紀雄様の弁当が減っている？」

「うん、そう。ほら、見て」

そう言っつて亜紀雄は自分の弁当箱を差し出した。無論これは自分の現状を知ってもらい、その後で一緒にこの謎について考えてもらおうとしたのである。こんな弁当箱を見れば誰だっつて驚く。スズラんだっつて一緒に驚いてくれるだろう、一緒に原因を考えてくれるだろう、と思っつていたのだが

「ああ、それは私が食べたのですよ」

スズランはけろっつと言いつつ放つた。

「……え？ ええ！ 君が？」

「はい、毒見も家臣の大切な職務ですから」

弁当付属のナプキンで口元を拭きながら、スズランは何ともなさそうに言う。

「私が作るものならともかく、他者が作るものではその中身にいまいち信用が置けませぬから。先刻亜紀雄様がお手洗いに行つてい間に済ませておきました。とりあえずその中には害のあるものは入つていないので、安心してお食べになつてください」

「……いや、お食べと言われても」

亜紀雄はくつきりと歯型が残つた沢庵を箸でつまみあげながら、「現代日本じゃ弁当屋が客の毒殺を企むなんてことはありえないんだから、わざわざそんなことしなくていいんだ。毒見なんて意味ないよ。これじゃ僕の弁当がただ単に減つていくだけで……」

……つて、あれ？ 沢庵は端っこかじつてあるだけなのに、何でエビフライは七割がた食べられてんの？」

「え？ いや、それは……」

「よく見ると、これ、毒見つて言う割りに、やたらバランスが明らかにおかしいよ。シューマイが確か四つ入つてたはずなのに、三つ

がかじられてて、残りの一つが見当たらない。そのくせこっちのレタスはほんの少ししか食べてない…… ……ねえ、スズラン。これ、まさか」

「いや、何を疑ってらっしやるのやら……」

「ちよつと、スズランの弁当も見せ　　って、ああ！　ちよつ

と！　エビの尻尾が僕のより二つ多い。ちよつと、これどういこうと！　毒見っていうわりに、偏りが激しくな　　ねえ、何で顔を逸らすノ？　明らかに目も泳いでるし！　目がＴになってるヨ！

大文字のＴ！　もー、ちよつと、怒るよーっ！」

と、亜紀雄が椅子から立ち上がった時、ふいに後方から、

「ねえ、鞘河君。ちよつといい？」

女子生徒の声が聞こえてきた。

今取り込み中だから後にしてよ、と思いつつも亜紀雄が振り返ると、目の前にはプラスチックのトレイ。弁当箱が口をきいたのか、それにしちや澄んだ声だったと一瞬思ったが、そんなわけないと考え直し、亜紀雄はその箱を握っている主の方を見た。その声の主はセミロングの髪を耳下で外にはねた、寄り目がちなクラスメイト

東香々美だった。

亜紀雄に対してプラスチックボックスを差し出している香々美の姿勢に虚を着かれ、一旦言葉を飲み込んだ亜紀雄は、

「……え？　何？　東さん」

「ちよつと、鞘河君に味見してもらいたくて」

そう言いながら、香々美はプラスチックボックスの蓋をぱかっとなげて、

「ほら、チョコレート作ったの」

「チョコレート？」

「そう。ほら、明日バレンタインじゃない」

言われて、亜紀雄は今日の日付を思い出す。　二月十三日。そしてこれに一を足せば、めでたく有名な記念日になる。亜紀雄は「ああ」と納得顔になり、次いでニンマリ顔になって、

「え？ 何？ 手作り？ まさか、明日本命に渡すつもりなの？」  
「うふふ、残念だけど違うよ。全部義理。お世話になった人に配ろうと思ってるの。それでね、手作りだから鞘河君に味見してもらおうと思ってる」

そう言いながら、香々美はトレイの中身を見せてきて、

「ほら、綺麗でしょ」

「……へえ、すごいね」

亜紀雄は中身をまじまじと見た。ボックスの中には赤、青、黄色、緑、オレンジ、白、黒、茶色、ピンク、金色、銀色に色付けされた、一口大の球形のチョコが箱いっぱいに入っている。

「カラフルだね」

「うん。色々試したの。……あ、もちろん味もそれぞれ違ってるんだよ？」

香々美は粒を一つ一つ指差していき、

「このピンクはイチゴ、黄色はバナナ、オレンジはみかん、白はミルク、赤はトマト」

「……と、トマト？ それはまた、斬新だね……」

「うふふ、そうでしょ？ でね、この緑はキャベツ、青はナスで」

「キャベツ？ ナス？」

「この茶色は十円玉、金色は五円玉、銀色は百円玉を」

「ちよ、ちよっと待って！ 色をコンプリートしたいあまり方向がおかしくなってる！ しかも犯罪！」

「大丈夫、絶対おいしいから。概ね」

「概ねって絶対じゃないじゃん！ お金の味なんて想像できないし……」

「もー、ぐちぐち言わないでとりあえず食べてよ」

ぐいっと押し付けるようにボックスを差し出してくる香々美。目の前の九色のチョコレートを見てその味を想像し、その想像だけで気持ち悪くなっている亜紀雄はちらつと隣のスズランの方を見て、

「……そ、そうだ！ スズラン、僕が食べる前にまずは毒見してくれないと。ね？ ほら、僕に何か害があるか分からないから、まずは君が」

「そんな、亜紀雄様、いけません」

スズランは首を横に振り、非難するような目で亜紀雄を見ながら、「他人様が手ずから作ってくださったものに毒見だなんて、失礼すぎます」

「貴様！ さっき何と言っていたあ！」

「それに私、お腹がぼんぼんです。これ以上食べたなら太ってしまいます」

精霊が太るカーーツ！

と叫びかけて、亜紀雄は黙った。そんなこと、教室で言うわけにはいかない。叫んだところでバカにされて笑い者になるのがオチだ。そこまでを見越してのスズランの発言だろう。相変わらず変なところで先見の明が立っている。

何も言えなくなって「ぐぬぬ」と歯軋りをしている亜紀雄に、

「ほら、鞘河君。食べて」

と、香々美はさらに前へとボックスを差し出してきた。近づいてくるチヨコレート群。亜紀雄は何とかこの状況を振り切る方法はないかと、入学試験以来だろう、頭を高速フル回転。そして何とか口を開き、

「……そ、そういうのは、やっぱりさ、気の置けない人に頼んだら？ ほら、僕と東さんって、席は隣だけど、たまにしか話さないじゃない？ そういう間柄だと変に気を使っちゃうし。そうになると、ちゃんとしたアドバイスもできないよ。だからさ、もっと東さんにはずばずばものが言えるような近い人に」

「私に気を使わない人？ でも、そんな人……」

口をへの字にして考え込む香々美。知り合いを順々に頭に浮かべていっているのだろう、しばらくうんうん言っていたが、急に閃いたように頭の上で豆電球を瞬かせ、

「……そうだ！ いた、私に生意気な人！ ……小林君だ！」  
そう言って後方へと方向転換し、香々美は教室の後ろの方の席へと行ってしまった。

その後、しばらくして教室の後方で始まった、

「ねえ、小林君。チョコの味見してくれない？ してくれたら小林君にも明日あげるから」

「へ？ 味見？ いや、まあ、それくらいなら って、何だ、

この妙にカラフルなチョコは！ 合成着色料よりも色合いが気味悪い……」

「つべこべ言わず食べえ！」

「うおっ、ちょ、やめろ、無理矢理口に」

という会話を背中で聞きつつ、犠牲となった小林雑音の冥福を祈りながら、亜紀雄は菌形のついたエビフライを口に運び始めた。

### 第三話「委員会」 その一

自分にしか出来ないことというのは、この世にいくつあるのだろうか？

そもそも、そんなものが存在するのだろうか？

この疑問は、亜紀雄が中学の頃 あるいはそれ以前 から、ずっと自問自答しているものである。

例えばスズランの場合は、掃除、洗濯を如才なくこなすし、料理の腕前も結構なものである。頑張りどころを間違えてはいるが、その他諸々のことでも割と気が利くし、性格も比較的温和。成績も優秀である。

それに加えてミテクレもなかなかなもので、学校に来てからの一ヶ月、彼女がもらった恋文の数は百を下らない（スズランはその手紙をすべて亜紀雄に見せてくるので、亜紀雄は必然的にその数を把握することになっている）。亜紀雄が

「誰かいい人がいたら付き合ってみたら？」

と何気なく提案してみたところ、一週間くらい前からめでたく陸上部のキャプテンである三年生と交際を始めたらしい。最近は彼と昼食をとったりしているそうだ（この事実を知ったクラスの男子達は、存外そうな顔を亜紀雄に向けてきた）。このことから分かる通り、スズランに異性を楽しませる性質があることは、もはや疑いようのない事実だろう。これは彼女が彼女たる意義の一つと言える。あるいは、東香々美にしてもそうだ。その真っ直ぐな性格は、大変親しみやすいといたるところで賛美されている。その上成績は学年トップテンで、クラスでの彼女の人気は男女共に高い。香々美はクラス 引いては学年において、なくてはならない存在として収まっているのである。

小林雑音だって、そのやたら落ち着いた性格は、将来いつぱしの人間になることを期待させるに足るものだ。体育の授業の最中、グ

ラウンドに野犬が侵入してきた時も、他の生徒が逃げ惑う中、彼だけはまったく動じずに黙々と長距離走をこなしていた。良い悪いはともかくとして、雑音がそのうち何かしらで名を馳せることになるのは、亜紀雄にも断言できる。

そう、別に日本一とか世界一とか、そういう技能だけを求めているわけではない。

自分が周囲の誰にでも誇れるものを言っているかどうかである。

例えば亜紀雄は、一年間アメリカに留学していたおかげで日常会話程度の英語は話せる。しかし、別にネイティブほどペラペラというわけではない。この高校には帰国子女が三人いて、彼らに比べれば亜紀雄の英語力など石ころのようなものだ。それに、難儀な文法問題ともなればテストで上位のやつには到底敵わないし、加えて言うなら、英語が話せたところで日本における日常では活かすべくもない。亜紀雄がこのスキルを他人に誇る機会はまったくないのである。

それはつまり、この能力は亜紀雄がここにいる理由にはならない、ということ。

他に、他に何かないのだろうか？ 亜紀雄が人に誇れるものは？ 人より秀でているものは？

勉強？

否。テストの順位など、下から数えた方が断然早い。

運動？

否。亜紀雄は今まで体育の授業以外のスポーツをしたことが

ない。

趣味？

否。彼の趣味は寝ること、それだけである。

特技？

否。部活にも入らず、それ以外の活動を何もしない亜紀雄に何かあるはずもない。

性格？

否。ネガティブを絵に書いたような人物たる亜紀雄に、人柄で褒められた経験は皆無である。

……やはり、僕には何も無い。スズランにも東さんにも小林君にもちゃんとするのに、僕には何も無い。僕がここにいる理由がない。ここにいる意義がない。

ここにいるのは僕でなくてもいい。

ギリツ、と亜紀雄は唇を噛んだ。

深く重い虚無感、無力感、脱力感。自分を肯定できない逡巡。このまま頭を目の前の机に打ち付けて、今すぐ意識を飛ばしてしまいたくなる衝動に駆られたところで

「もう、鞘河君、ちゃんと聞いてますか？」

舌足らずな声が聞こえてきて、亜紀雄は思考を中断した。

声が出た方に目を向けると、亜紀雄の隣の席、そこにちょこんと座っている背の小さい女子生徒が視界に入った。亜紀雄と同じ委員会に属する一年生、花塚まいみである。

まいみはポニーテールを揺らしながら、呆れたような諦めたような顔で、

「仕事の割り振りくらい、きちんと聞いてください」

「……あ、ごめん」

亜紀雄は謝りながら、机の上のプリントに視線を戻す。

『年度、体育委員会仕事分担表』

プリントの上段にそう書かれている。そしてその下には表が乗っかけていて、学年、クラス、名前、担当月がマスを埋めていた。

現在は放課後、委員会の時間なのである。

亜紀雄の通うこの高校では、毎月第一木曜に委員会で集まり、そ

それぞれの職務を遂行することになっている。美化委員や園芸委員など全部で十二個の委員会が存在していて、全校生徒がそのいずれかの委員会に属しているのである。

そして、亜紀雄が在籍しているのが体育委員。

体育委員の仕事とというのは、簡単に言えば体育関連の設備の管理。体育館や体育倉庫、グラウンド、プールなどの設備や、その他ボールや跳び箱などの道具を管理するのである。体育と十派一絡げに言っても、担当する場所、物品はなかなか多い。効率的に仕事をこなすためには、クラスごとに担当場所を決める必要がある。

なので仕事の前に、委員会のメンバー全員で空き教室に集まり、仕事の分担をしていたのである。

まいみは、ようやく目の焦点をプリントに合わせた亜紀雄に、「別に難しいこと言ってる訳じゃないんですから、委員長の話からいちちゃんと聞かないとダメですよ」「

「そうだね……ごめん」  
「……まったく、返事にも覇気がないですね。そんな暗そうな顔して変に思い悩まないで下さいよ。そんなんだから『歩くマイナス極』なんて呼ばれるんです」

「な、なぜ僕の中学の頃のおだ名をツ？」

「顔を見れば分かりますよ」

ぷいっと顔を背け、さも当然そうな声で言うまいみ。

亜紀雄は顔を伏せた。

『歩くマイナス極』

この言葉が、やけに胸に響く。二、三年前、さんざん揶揄された言葉。呼ばれた名前。こんなネガティブなイメージしかないおだ名は、もちろん亜紀雄自身だって気に入っていない。しかしそれ以上に嫌なのが、自分をしてこのニツクネームが妥当だと思えてしまうことだった。

マイナスでしかない存在。ネガティブでしかない存在。負け続ける存在。それが自分。



スズランが椅子に腰掛け、プリントを取り出したのを見て取った  
亜紀雄は、まいみにも聞こえないくらいのヒソヒソ声で

「……雪代君に会ってきタ？」

「はい。面と向かって告白されました」

「……そう。……で、ちゃんと行ってきタ？」

「ええ、もちろん」

スズランは得意げな顔で、

「ちゃんと、了承してまいりました」

「……………へ？」

亜紀雄は裏返った声を上げた。

「……了承？ って、つまり永田先輩とは別れて、雪代君と付き合  
うってコト？」

「いいえ」

「……じゃあ、二股？」

「違いますよ」

スズランは明快な否定。亜紀雄は余計に意味が分からなくなりな  
がら、

「え？ でも、永田先輩とも、雪代君とも付き合っただよネ  
？ それは二股ってことじゃないノ？」

亜紀雄の疑問に、スズランは「うふふふ」とやたらおかしそう  
な表情で、

「確かに雪代さんとも永田さんとも交際を続けますが、私はそれ以  
外にも紀野さん、安田さん、岩坂さん、小野さん、常盤さん、倉井  
さん、早野さん、上月さん、上村さん、五十嵐さん、夏目さんとも  
交際をしておりますから、二股ではありません。十三股です」

亜紀雄はあんぐりと口を開ける。

「……え？ みんな遊びってこと？」

「そんなことはありません。みなさん本気です」

スズランはいたって真面目な顔で首を横に振り

「みなさんを本気で我々の手駒に代える予定です」

亜紀雄は口をさらに大きく開けた。

「私も日々女を磨いてはおりますが、すべては亜紀雄様のため。亜紀雄様の武器の一つとするために他なりません。周囲を籠絡し、丸め込み、抱き込み、そしてしかる後に利用するために、私は私に出来る最大限のことをしているに過ぎませぬ。他の殿方を操り、情報を引き出し、時に捨て駒として使う。そのための私の外見なのです。最初に陸上部に在籍する永田さんを取り込んだのも、彼が兵としてなかなか使えそうな駒だったからです。戦の折には、どうぞ率先して使ってやってくださいまし。そのために私は昼休みの貴重な時間を彼と過ごしているのですから。うふふ。今はまだ何もありませんが、亜紀雄様のためになるならば、いくらでも体を張らせていただきます。もちろん、もし亜紀雄様が欲するならば、私は喜んで直接あなた様のお世話も」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいや……」

亜紀雄は首を小刻みに振り、

「……そんなことして、みなさんがかわいそうじゃ」

「そんな、駒の心内などいちいち考えている暇などありません。国のためならば、使えるものから使っていかなば」

スズランの発言に、いよいよこめかみが痛くなってくる亜紀雄。

「……いや、でもネ？ そんな人を騙すようなことをして、スズランがその人たちに恨まれちゃうし」

「心配ございません。駒共には亜紀雄様のあの字も出しておりませんゆえ、亜紀雄様に害が及ぶことはありません。確かに私にはいくらかの危険はありますが、私は精霊ですので、滅多なことがない限り消えてなくなることはありません。亜紀雄様の最後を看取るまで、お側に仕えさせていただく所存にあります」

「み、看取るって、一体何年後まで」

「コホンッ」

背後から咳払いが聞こえ、亜紀雄は振り返った。

そこには口元に拳を当てているまいみ。みけんにしわを寄せ、

「そういうのは別のとき、別のところでやってください。今は委員会の時間です。ほら、早く持ち場に行ってください！」

しっしと手を振る。見ると、他の生徒も席を立つところだった。

いつの間にか会議が終わっていたらしい。

亜紀雄は得心がいかないままスズランを引っ張り、すごすごと教室を出て行った。

### 第三話「委員会」 その二

亜紀雄とスズランの担当場所は、第二体育倉庫だった。

この部屋は体育館の建物の隅の方にひっそりとあるもので、外からしか入れない造りになっている。コンクリートで固められた立方体に明かり取りの窓がついているだけの、こざっぱりとした閑静な場所。跳び箱を四つくらい並べればそれだけで足の踏み場がなくなってしまうような、至極狭い倉庫なのである。

この部屋の使用方法はというと、準ゴミ置き場のようなもの。

表面がボロボロで使いようがなくなったバスケットボールや、十数年前から置き放してある剣道の防具など、近々捨てる予定のものをとりあえず押し込んでおく場所である。そんなことのためにしか使われないので、ここに入出入りする人間は限られている。ゴミを放り投げに来た体育教師や、今回の亜紀雄やスズランのような委員会の特命で掃除を仰せつかった生徒くらいのものだ。他には滅多に人の出入りがないために、床にはホコリが溜まり、部屋の隅にはクモの巣がかかっている。

そして今回、中に詰まっていたゴミ予備軍は先月にすでに全部出していたので、倉庫の中は空っぽ。ドアと窓とゴミ箱と天井の電球以外何も無い空間が出来上がっていた。

というわけで、今月の亜紀雄とスズランの掃除対象はただ一つであり

「 だからさあ、スズラン」

亜紀雄は倉庫の床をホウキで掃きながら、彼の傍らにしゃがみこんでチリトリを構えているスズランに話しかけた。

「僕は別に、この国を征服するつもりなんて全然ないんだ。だから手駒なんて集める必要もないし、そのために君があれこれ動く理由は何もないんだヨ。その十三人に対して好意があるわけじゃないんならさ、お互いのためにちゃんとお断りした方がいいと思うんだ」

腕をせつせと動かしながら、諭すように訴える亜紀雄。

それを黙って聞いていたスズランは、チリトリを握ったまま立ち上がり、それをゴミ箱の上でひっくり返ししながら、

「……なるほど。つまり亜紀雄様は、自身の戦はできるだけ避け、頭脳戦で国を我が物にする主義なのですな」

納得顔でうんうん頷く。

「だからできるだけ柔和に他人と接しろ、と。そういうことですねなるほど……。そのようなアウトローな戦法は、私としては狡くはいただけない部分もあるのですが、亜紀雄様が言うのでしたら仕方ありません。私もその命に従いましょう」

「……もう何でもいいから、とにかく十三股はどうにかしてクレ」

亜紀雄は疲れたように肩を落しながら呟く。

スズランはチリトリを握り直しながら、

「では、その辺りのことは明日以降、おいおいやっていくことにいたします。……とりあえず掃除も終わりましたし、今日は帰りましようか。私も早く夕飯の支度をしなければなりませんし」

「……そうだね」

亜紀雄は五十キロを完走し終えたランナーのような声で答えた。

そして片手にホウキを握り締めたまま、この倉庫唯一のドアのノブを回し、押し開こうとしたところで

ガタンッ

「……………え？」

思わぬ反発力に、首を傾げる亜紀雄。そしてもう一度ノブを回し、

ガタンッ

ガタンッ、ガタンッ、ガタンッ、ガタンッ、ガタンッ

「……………あれ？」

「どうしました、亜紀雄様？」

「いや、それが……………」

亜紀雄は額に縦線を入れた顔で、スズランの方を振り返りながら

「 ドア、開かないんだけど……? 」

\*\*\*

\*\*\*

亜紀雄が腕時計を見ると、時針は八時過ぎを示している。

今日学校に来てから十二時間、放課になってから四時間、第二体育倉庫の掃除を始めてから三時間　そして倉庫に閉じ込められてから二時間が経ったことになる。

あれから、二人でドアに体当たりを食らわしてみたがびくともせず、外に届くように叫んでみたが誰かが助けに来る気配もない。出入り口はこの扉一つだけだし、窓もはめ込み式で開閉しないので、完全に閉じ込められたことになる。八方塞である。

何でこんなことになったのか？

亜紀雄が先ほどの空で聞いていた体育委員長の話を思い出してみたところ、そう言えば第一体育倉庫の用具を入れ替えると言っていた。第一倉庫にはバレーボールのポールやマット、跳び箱など、重量のあるものが置かれていたはず。そして入れ替えと言うからには、それらを倉庫から追い出すことになるだろう。

その用具群によって、この第二倉庫の入口は塞がれたのかもしれない。

ドアノブはちゃんと回るので、鍵が壊れたというわけではない。押し開こうとすると扉が何かに当たり、動かないのである。明らかにドアの向こうにある何かが邪魔をしている。二人がかりで押しても動かない何か。……やはり、体育用具の類だろう。

その用具を戻してくれれば出られるんだが……。

しかし、それは望み薄なことだった。時間はもう八時を過ぎていく。下校時刻はとつくの昔だ。十中八九、生徒も先生も帰ってしまっただろう。

そう言えば、この第二倉庫の入口には軒下スペースがあった。その内側に置いておけば、たとえ雨が降っても用具が濡れる心配はないだろう。それを考慮してそこに放置したとも考えられなくもない。しかしだからって、入口付近に置き放しておくのは不注意すぎる。誰の指示で動いていたのかは亜紀雄の知るところではないが、その人は中に誰かがいることまで頭が回らなかったのだろうか。

「……まったく、どうしたもんか」

亜紀雄は顔をうつむけながら呟いた。壁によりかかって、体育座りをしている体勢。扉を叩いたり叫んだりするのにも疲れ、一時間前からずっとこの姿勢なのであった。

きゅるる

亜紀雄の腹が鳴った。無理もない。夜の八時といえば、いつもなら夕飯など食べ終えている時間である。さらに言えば、今日は夕飯前のつまみ食いも叶っていない。昼食以来七時間、亜紀雄は何も食べていないのである。

「申し訳ありません、亜紀雄様。私がもっと注意していれば……」  
亜紀雄の隣で同じく体育座りをしているスズランが、申し訳なさそうな声で言ってきた。

「亜紀雄様にひもじい思いをさせるなど、このスズラン、一生の不覚です。……せめて私が、こんな樹脂製の人形ではなくアンパンかメロンパンあたりに憑いていれば、亜紀雄様に頭の一部を差し上げることもできたでしょうに……」

「……まあ、一体どこからその二つがインスパイアされたのかはあえて聞かないけどさ」

亜紀雄は頬に冷や汗を垂らし、

「ただ、実際にそんなことすると、腐らないように数日に一回パンを焼かなきゃいけなくなるから、たとえ出来たとしてもやらな

いでクレ」

あごを引きつらせた表情でそう答える。そう答えたところで、  
きゆるる

再度、亜紀雄の腹が鳴った。腹時計のなんと正確なことだろう。  
現在亜紀雄の胃袋では、クーデターでも引き起こしそうな勢いで腹  
の虫のデモ行進が行われている。

亜紀雄は空腹感に苛まれつつ、打ちひしがれたように天井を見上  
げて、

「……しかし、このままだと明日の朝までずっとこのままダ。それ  
まで水も飲めないなんて、餓死してしまフ……。ああ、せめてあの  
窓を蹴破って出れたら……」

そう言いながら、ドアの隣上方にある、一メートル四方くらいの  
窓ガラスを恨めしそうに見つめた。

スズランは、亜紀雄のその視線を目で追い、

「……あの窓、壊してよろしいのですか？」

「ん？ ……ああ。本当はいけないんだろっけど、できるならそう  
しタイ。この際しよっうがないダロ。後で怒られるかもしれないけど、  
数時間も空腹に耐えるのよりはマシだヨ」

「そうですか……」

そう呟くと、スズランはすくっと立ち上がった。そしておもむろ  
に、窓の方へと近づいていく。

「……ちよつと、どうする気？」

「決まっていますわ」

そう答えながら右拳を握り、肩の上に持ち上げるスズラン。

「ちよ、ちよつと待った！ その窓、結構硬くて」

しかしそんな亜紀雄の声を無視して、スズランは上半身を回し、  
腕を突き出しながら、その窓ガラスにストレートのパンチを繰り返  
した。

ゴンッ

しかし、聞こえてきたのはガラスの割れる音ではなく、もっと鈍

い音。

その衝撃音から一秒置いて、何か小さいものが亜紀雄の目の前に飛んできた。顔を近づけてよく見ると、それは白くて、人の手の形をしたもの。マネキンの手のようなものだった。

「……うくん、傷はつきましたが、割れませんか」

そう言いながらくるっと振り返るスズラン。見ると　その右手がなかった。手首の部分が砕けている。

「……！　ちよ、大丈夫ツ？」

慌ててスズランに駆け寄り寄る亜紀雄。

しかしスズランの方はすました表情で、

「ええ、この体はただの器ですから、なんてことはありません。後で接着剤でくっつけておけばよいでしょう。……うむ、しかし困りましたね。ここまで硬いと。何か工夫をしなければ……。体当たりしようにも、あの高さでは届きませんし、周りに硬くて重いものもありませんね。うむむ、一体どうすれば……」

亜紀雄の心配などよそに、窓を睨んで考え込むスズラン。

確かに、スズランの体は元々はプラスチックのマネキンであり、物理的損傷はスズランには何のダメージも与えないことは亜紀雄も知っていた。人形を修理するように接着剤でくっつけておけば元通りになることも。

しかし、人間以外の何者にも見えないような少女が右手首を完全に失っている姿は、平和な世間しか知らない亜紀雄の気をもませるのには十分なものだった。スズランは痛がる素振りも見せないし、血も出ない。しかしその砕かれた手首は、亜紀雄にとって見えていて十分痛々しいものだった。

と、そんな亜紀雄の不安そうな表情に構うことなく、スズランは「……そうですわね、あの手でいってみましょう」

ぱつと何かを思いついた顔になった。そして窓がある方向とは別の、まっ平らな壁に視線を移す。

(……今度は何をやる気なんだ?)

亜紀雄がまた不安そうにスズランの行動を眺めていると、スズランは壁に相對して半身の姿勢になった。今にも駆け出しそうな体勢。「……まさか」

と呟いた亜紀雄の予想通り、スズランはそのまま壁に向かって駆け出して、壁に体当たりを食らわせた。

ゴンッ

さっきと同じ　もしくは少し大きく太い　音がする。そして、また何かがトスンと床に落ちた。

それはさっきよりも大きなパーツ　スズランの右腕だった。

「……これならいけるでしょうか？」

そんなことを呟きながら、スズランは制服の上着をこそごと脱ぎだす。そして残る左手で落ちた右腕を拾い上げ、脱いだ上着でくるんだ。

「……ちよつと、スズラン。何する気？」

「ふふ。まあ、見ていてください」

そう言つと、スズランはくるまった上着をまるで投げ縄のように頭上でくるくる回し、そしてそれを窓に向かって振り下ろした。

がしゃあん

今度こそ、甲高い破壊音。ガラスの破片が飛び散つた。

「ほら、割れましたわ。どうです、亜紀雄様。私の手際は？」

「……いや、まあ……」

得意げに胸を張るスズランに、亜紀雄は呆けたように答える。

「さ、亜紀雄様。ここから出しましょう。……おつと、この割れ残りは危ないですね。払っておきましょう」

そう言つて、スズランは自身の左腕でもって窓枠に沿って残っているガラス片を払つた。当然のように手に傷がつき、服に切れ目が出る。しかしスズランはそんなことを気にすることもなく、せつせと腕を破片にぶつける。

そして窓枠からガラス片が見えなくなったところで、

「さ、どうぞ。亜紀雄様」

「……………う、うん」

促されるままスズランに手を引かれるまま、亜紀雄は倉庫から抜け出した。

窓から這い出すと、外は星空、満月だった。

ようやく出れた、という安堵感も亜紀雄の中には確かにあったが、それよりも亜紀雄には、スズランの現在の容姿の方が気になっている。

亜紀雄の目の前、月明かりに照らされている、右腕が壊れ、左腕が傷だらけで、汚れた上着を肩に掛け、切れ目があちこちにあるワイシャツをまとった少女は、それでも晴れやかな笑顔を亜紀雄に向けたままで、

「さあ、早く帰りましょう」

「……………」

ここで自分が言うべき言葉は、やはり「ありがとう」なのだろう。恩を受けたことに対する返答は、言うまでもなくそれが最適である。しかし亜紀雄は、スズランにはもっと言っておくべきことがあるように思えた……………思えたが、それはどんな言葉なのかまでは、亜紀雄には分からなかった。

分ならず、思いつかず、結局亜紀雄は

押し黙ったままで、スズランの後ろを歩き出した。

## 第四話「転校生」 その一

「今日は、転校生を紹介する」

スズランが来て二ヶ月が経った、三月第一月曜日の亜紀雄の朝は、担任のそんなセリフから始まった。

一瞬でざわめきに包まれる教室。

そんな事前情報は、生徒の誰一人聞いていなかった。一年四組三十九人の生徒全員（本日の病欠一名除く）にとってみな等しく、寝耳に水な展開。みんながみんな意外そうな表情を浮かべ、近所同士で「知ってた？」、「いや、知らなかった」などの確認をし合っている。

しかし担任教師はそんな反応を気にすることなく、ドアの方を向いて、

「おい、では、入ってきてくれ」

そう呼びかけた。

すると、がらがらと扉が横に開いて、そこから現れる生徒。教室に足を踏み入れ、教卓の方へゆつくりと歩を進めてくる。

生徒達が静かに見守る中、その転校生はすたすたと歩き続け、そして担任の隣にたどり着くとくるっと左向け左をし、つまりは生徒達に向かって真正面を向いた。

ようやくその容姿をクラス全員の前に現した、ブロンドのロングヘアに釣り上がった目つき、スレンダーな体躯をした女子生徒は、その顔にスマイルを浮かべ、蚊の鳴くような声で、

「初めまして。イギリスから来た、東リーネ（オーストラリア）と言います。よろしくお願ひシマス」

そう言い、ペこりと斜め四十五度のお辞儀をする。

その貴族のような丁寧な物腰と容姿に、男子も女子ものべつまくなくその姿を呆けたように眺めた。そしてほどなくしてどこからか拍手が始まり、やがてそれは三十九人全員に伝播した。拳句は、調

子に乗った数名の男子が口笛まで鳴らし、野球の応援のように「ようこそー」と叫んだりもしたのだった。

しかしそんな喝采にも、その転校生、東リーネはにこやかに微笑んで、

「ありがとうございます」

と、気後れする様子もなく応対する。

担任教師は喝采をまあまあとなだめると、

「じゃあ、君の席は窓際一番後ろの空いてるところだ。そこに座ってくれ。あと、それから、そうだな」

担任はぐるりと教室を見回した後、教室の中ほどでポカンとしていた亜紀雄を指差し、

「じゃあ、鞆河。最初はお前が彼女の面倒を見てやれ」

「ええ！ 僕ですカツ？ なぜですカツ！」

「ああ、お前英語できるだろ」

「……………」

納得の理由に、反論できなくなる亜紀雄。そう言われたら、しょうがない。気が乗らないとか、面倒だとか、初対面の人を相手にするのは気が引けるなどという理由が通じないのは、亜紀雄にも自明のことだった。

まあ、その世話役もせいぜい一週間くらいやればいくらいのものだろう。

そう思い「やれやれ」と呟きながら、亜紀雄はため息を一つ吐いた。

転校生東リーネの容姿が男の大多数を惹きつけるに足るものであることは、亜紀雄も認めるところであった。小顔に白い肌、すつとしたスタイル。一言で言えば「モデルのような」という形容表現がしっくりくるものである。

そんな女性が身近にいるのならばお近づきにならない手はないと

考えるような短絡的かつポジティブな思考を持つ男子生徒は、二十人もいれば一人や二人含まれるのもある意味当然の流れで、こと亜紀雄のクラスにはそんな輩が七、八人いた。

彼らは休み時間ごとにリーネに話しかけ、また話しかけるための話題を創作するのに四苦八苦し（しかし結局のところ、彼らの

「イギリスのどこから来たの？」

「日本語どこで勉強したの？」

「うちのクラスにも東さんっているんだけど、親戚？」

というようなありがちな質問集は

「バーミンガムデス」

「ママが日本人なんデス。家ではたまに日本語を使うんデス」

「そうなんデスカ？ 知りませんデシタ。聞いてないデスねー」

という、さらに当たり前の返答のみで終わってしまうので実は結ばなかったのだが）、そんな労もせず、授業システムや食堂システムの説明ということでリーネに話しかける機会を得ている亜紀雄に対して、羨ましさと同様疎ましさを三対七程度含んだ視線を浴びせている。亜紀雄も亜紀雄で、背中に針が刺さるような感覚を覚えるようになり、そんな傾向にも薄々気付いてはいた。

しかし実際のところ、亜紀雄にとってこのタイミングで仕事が増えるのは、まったくもって望まないことだった。

それは説明するまでもなく、亜紀雄は現状でも十分参っていたからである。

まず一つとして、先週の委員会で割ってしまったガラスへの弁償として、亜紀雄は毎日のトイレ掃除を命じられていた。

この刑を言い渡した学年主任の弁によると、確かに体育用具を出入り口に置き放したのも悪いには悪いが、しかし公共のものである窓ガラスを割ったことも悪いことは悪い。あの窓ガラスは市民が働いて収めた税金から賄われているもので、その大切さを認識せねばならぬ。というか、もう少し周囲に注意を払って生活するように。一応便宜でトイレ掃除二週間で許してやるが、今度やったらきつち

り弁償してもらおう、とのこと。

正直なところ亜紀雄はこの説明にまったく納得できていなかったが、変に食い下がって逆に「反省しとらんのか」と刑を重くされては敵わないので、しぶしぶ従うことにしたのである。

もちろん、スズランが腕を壊して上着でくるんで云々という事情を先生に説明できるわけもなく、あの窓も亜紀雄が力づくで割ったということにしてある。そういうわけで、亜紀雄は毎日放課後一人、トイレ掃除をすることになったのである。

申し訳なさそうな顔をしたスズランが「手伝います」

と言い出してきたが、逆に手伝われて先生に見つかろうもんなら逆効果にしかならない気がしたので、詮無く亜紀雄はその提案を固辞したのだった。完全な不幸スパイラルである。

また、亜紀雄の苦心はそれだけではなかった。

体育倉庫脱出劇の次の日、スズランは早速彼女の 駒 十三人に別れを突きつけていったのである。

どのようにやったのかは亜紀雄の知るところではないが、スズランもうまくその男子達を言いくるめたらしく、亜紀雄も逆恨みで襲われるようなことはなかった。椅子の上に画鋏を置かれたり、ロッカーにゴミを詰め込まれたり、上履きを隠されたりと、その辺りのとぼっちりは覚悟していたが、すべて取り越し苦労だった。被害者と廊下ですれ違っても睨まれることすらなかったのである。逆に亜紀雄が「一体何をどうすれば十三人との円満別離が可能なのか？」と悩むほど平和だった。

しかし、問題はその周囲。噂話の方だったのである。

スズランが陸上部の先輩などと別れたということはあつという間に周囲に広がり、それが色々な憶測を呼んでしまったのだった。これらの噂が収束した先は、つまり

「亜紀雄とスズランが喧嘩して、やけになって他の男に走ったが、結局仲直りして元の鞘に戻った」

ということ。もはや、亜紀雄とスズランが恋人であることはすでに大前提になっていた。

おかげで廊下を歩くと度々変な視線を背中に感じたし、どこからともなく「……まったく、迷惑つたりやありやしない」という（恐らく十三人のうちの誰かが想い人だったのだろう）女子生徒の陰口が聞こえてきたし、近しい友人の冷やかしも散々受けた。

かようにして、亜紀雄はこの一週間、肉体的、精神的双方からの攻撃に抗い続けていたのである。

もうこれ以上、変な問題は起こらないで欲しい。

亜紀雄は切実にそう願っていたのだが、

その願いは、叶うべくもなかった。

発端は、リーネが転校してきてから約一週間が経った頃の昼食。

その日、スズランは亜紀雄の元に来てから二度目の失敗をやらかしてしまった。つまり、前日の夕飯を焦がしてしまい、その日の昼食の弁当が用意できなかったのである。

加えて、その日の朝はあまり時間がなかったため、通学途中に昼食用の弁当を買うことができなかった。なので、その日の昼食は購買で済ませることになったのだった。

昼休み、

「本当に申し訳ありません」

と、前日から数えて百回近くになる謝罪を述べているスズランを連れ立って、亜紀雄が

「いや、別にもういいから。早く購買に行こう。売り切れちゃうヨ」と、まったく怒っていないことを表すような笑みをスズランに向けながら、立ち上がった。その時だった。

「エヘヘ」

と、リーネが亜紀雄の方に近づいてきた。悪戯っぽく笑い、手を後ろで組んでいる。まるでこれから驚かせようとしている子供のよ

うな仕草だった。

亜紀雄はそのリーネの様子に、少々困惑の表情を浮かべながら、

「え？ 何、リーネさん？」

「お世話になっっているお礼デス」

そう言いながらリーネが差し出してきたのは、ナプキンにくるまされた直方体。一目でそれが弁当箱であることが分かるものだった。

「こんなこともあるうかと、作ってきたんデス」

「こ、こんなことって、一体、あなたどんな」

「スズランさんの分もありマスよ」

身を乗り出してきたスズランに、リーネは背中からもう一つの弁当箱を取り出した。

「さ、お二人とも食べてください」

そう言いながら、リーネは二人のリアクションに構うことなく二つの弁当を机の上に置いて、いそいそとナプキンをほどく。そして弁当箱のふたを開け、亜紀雄にスイツと差し出してきた。

亜紀雄は突然のことに呆けながらも、しかし好意ならば受け取っても悪いことじゃない、というかむしろ拒むのは逆に悪いんじゃないかと思いつながら、

「え？ いや、ま、まあ、そう言うなら……」

と、半ば押し切られるようにリーネから弁当を受け取った。

その中身は、白飯、煮物、焼き魚と、イギリス帰りの人間が作ったとは思えない日本料理。亜紀雄は手渡された箸でつまんで一つずつ口に運んでいくが、どの料理も作成後数時間たったとは思えないほど味を楽しめるものだった。

二人が食べる様子を、横で嬉しそうに眺めていたリーネが、

「どうデス？ エへへ、練習したんデスよ？ おいしいデスか？」

「え？ ああ、おいしいヨ」

「どれくらいおいしいですか？」

「どれくらい……いや、ものすごくおいしいヨ」

「ものすごくってどれくらいですか？」

「どれくらいって、それは……………驚くほどおいしいヨ」

「ホントデスカ！ よかつター」

と無邪気に笑うリーネ。

その喜びように、亜紀雄が少々引きつった顔で笑顔を返している  
と、

「……………そうですか。私の弁当は全然驚くほどではないのですか……………」  
背後から、おどろおどろしい声。

亜紀雄がぎくりとしつつ首を回して後ろを振り返ると、目を逆三角にしたスズランの顔。どんよりとした空気をまとい、肩の上には紫色の火の玉が浮かんでいる。

スズランは刺すような視線を亜紀雄に向け、

「……………そんなにお口に合うのでしたら、毎日リーネさんに作っていただいたらいかがです？」

「へ？ いや、そういうわけじゃなくて、スズランの料理だって十分おいしい」

「十分って何ですか！ 最低限のレベルだということですか！」

「いや、いや、ものすごくおいしいと思って」

「嘘です！ だって、今までの二ヶ月間、私は毎日毎日亜紀雄様のお食事を作ってきましたが、一度だって『おいしい』なんて言うてくださったことなかったじゃないですか！」

「いや、言わないだけで、おいしいとは」

「それは、言うほどではないということですかっ！」

「いや、だから」

この日、亜紀雄は昼食を食べる暇もなく、昼休みいっぱいを使ってスズランをなだめることになったのだった。

あるいは、金曜日の放課後。

教室のあちこちで帰り支度を済ませた生徒達がこれからあるいは週末の予定を話し合っている中で、リーネが亜紀雄に話しかけてき

た。

「アキオ。明日、映画見に行きませんか？ パパにチケットもらったんデス」

「映画？ ……ええと、明日は一応暇だけど……」

「ホントデスカ、じゃあ一緒に」

「私も同行します！」

亜紀雄の横でその話を聞いていたスズランが、割り込むように言ってきた。

「私の役目は亜紀雄様の身辺警護ですから、私も当然着いていかなければ」

「でも、チケット二枚しかないんデス。しかもこれ人気で、予約で満席みたいなんデスけど……」

「では、諦めてもらうしかありませんね」

両手を腰に当て胸をそらして、スズランはきつぱりと言う。その顔にはさも勝ち誇ったような表情が浮かんでいる。

リーネは二枚のチケットひらひらと振りながら、

「いいんデスカ？ これ、アキオが大好きなやつデスよ？ これ逃すと、もうチャンスはナイかも」

「ああっ、ほんとダ！ 『新宿イーストレイク』！ これ見たかったんダ」

そのチケットを見て、思わず叫ぶ亜紀雄。

その亜紀雄の食いつきようを見て、スズランは驚いたように、

「な、なぜ転校してきて一週間も経ってないあなたが、亜紀雄様の嗜好を知っているのです！」

「人付き合いは長さよりも密度デスよ」

チツチツチと人差し指を振りながら、リーネは答えた。

「英語で話せるおかげで、アキオとは日本語のときよりもナチュラルな話ができるのデス。エッへへ。もう今では、あなたよりもアキオについて詳しいかも知れませんね」

「な、何をでたらめなことを！」

「なら、あなたはアキオの好みを言えますか？ アキオの好きな映画は？ 好きな作家は？ 好きな漫画は？ 好きなミュージシャンは？ 好きな女優は？ どう德斯、スズランさん？ 言えるんですか？」

「……うぬー」

歯を食いしばるスズラン。

従者という立場が立場であるため、スズランは日ごろ亜紀雄の生活に無理矢理干渉することはない。あくまで世話をするだけである。なので亜紀雄の個人的な嗜好に関しては、知らない、というより知らないようにしてきたのである。

何も言えなくなっているスズランに、今度はリーネが勝ち誇ったような表情をぶつけて、

「ちなみにワタシは言えますよ？ アキオが好きな映画はピポン。好きな作家は京極。好きな漫画はホリランド。好きな音楽は - f l o 。好きなポテチの味は薄塩。好きな女優は仲間です。ウフフ。どう德斯、スズランさん？ あなたはここまでアキオのことを理解してイマスか？」

リーネの「降参德斯か？」というような表情に、業を煮やしたスズランは、

「な、何を言いますか！ 私は毎日亜紀雄様の身の回りのお世話をしているのですよ！ 亜紀雄様の家の掃除も炊事も洗濯も、全部私がかっているのです！ そうですよ！ 亜紀雄様の身辺のことなら何でも存じております！ た、例えば………そう！ 亜紀雄様の今日の服装！ ワイシャツの下に、白地で胸の辺りにリンゴの柄がついたTシャツをお召しになっております。あと、今日は寒いのでズボンの下に体育のハーフパンツを穿いていて、今日のトランクスの柄は青と紫のチェック地で、ゴムのところに『アキオ』という刺繍が

「言うナーツ！」

「亜紀雄様の嗜好だってちゃんと存じております。好きな女性の夕

イプの平均サイズはB 87・7、W 5」

「な、何を元にそのデータを算出したんだッ！」

この日、亜紀雄はなぜか周囲の男子から暖かい視線を浴びることになった。

つまりはこのようなことが毎日のように繰り返されるようになり、こんな毎日を一週間も繰り返せば、当然のごとく亜紀雄も疲れにくる。自分はネロとパトラツシユの次に哀れみの視線を多く受けた人間ではないかとすら思えるほどだった。

そんな毎日を送っていたため、東リーネが転校してきてから二週間が経ったその日の放課後、掃除場所に行く直前にスズランが、「すいません、ちょっとどうしても外せない用事があるので、亜紀雄様は先に帰っていてください」

と言ってきたとき、亜紀雄は心の中で安堵した。

亜紀雄が疲れる理由というのは、いわばスズランとリーネ両方を相手にすることで発生するもので、片方だけでも亜紀雄の周囲から離れていればその心配はない。だから、少なくとも掃除の間は安心できる。亜紀雄はスズランの用事が一体何なのかという疑問を疑問と思うこともなく、そう思った。

そしてつつがなく掃除が終わり。

亜紀雄が教室に戻ると、残っている生徒はほとんど いや、一人しか いなかった。西日が差し込む教室。その中ほどで誰かを待つように一人立っていた生徒。それは黄金色の髪を腰元まで伸ばした女子生徒 東リーネだった。

リーネは教室に入ってきた亜紀雄に気付くと、振り返りながら「あ、アキオ。ご苦労デス」

と笑いかけてくる。

スズランが側にいるときはその笑顔にも戦々恐々としてしまうが、今日は特例。その笑顔もクラスメイトのそれではない。

亜紀雄も何ともなしに、

「おつす。」

と答えた。そして自分の席に着いて机の中を覗きこみ、帰り支度を始める。

リーネは最初その様子を笑みを向けて眺めていたが、すたすたと亜紀雄の後ろに近づいていった。そして机の中から教科書ノート類を取り出している亜紀雄の肩の上に顔を出し、口を耳元に触れるギリギリまで近づけてきて、吐息のような声で

「アキオ。悪いデスけど、スズランさんのことは、忘れてクダサイ」

「……………え？」

亜紀雄は思わず横を向いた。

それに合わせて、リーネは後ろへ一つステップを踏む。そして背中を手を組み、その顔に満面の笑みを浮かべて、

「ウフフ。いきなりで、別れの言葉を言う暇も与えないのは悪いとは思いますが、これもあなたのことを思っていることなんデス。危険因子はすべて排除しなければなりません。それがワタシの仕事。東家の仕事。分かってクダサイ」

「え…………？ いや、君が何を言ってるのか、意味がさっぱり分からないんだけど…………」

亜紀雄は、その展開とリーネのセリフの意味がまったくわからないうことを顔全体で表しながら答える。

「ええと、つまりデスね、簡単に言っと」

リーネは依然微笑んだまま、そのブロンズの長髪を後ろに流して、

「あの精霊は、あなたのところには、もう帰ってこない」

#### 第四話「転校生」 その二

亜紀雄は、鍵穴に鍵を差し込んだ。

時計回りに回すと、ガチャリと言って鍵が回る。

ドアを押し開くと、そこは真っ暗な玄関だった。

見慣れた、我が家の玄関。

中学二年までずっと住んでいた家であるし、アメリカから帰ってきてからのこの一年間も、毎朝毎夕通っている場所だ。何百回、何千回、何万回と目にした内装。目新しいものなんて何一つない。

しかしそれでも、違和感が拭えない。

そう　今日は静かだ。

この二ヶ月、この場所を通る時は、いつも隣にスズランがいた。

朝は「さあ、学校に参りましょう」と言って、夕方は「では、私は夕飯の支度をいたしますね」と言って、亜紀雄と並んで微笑んでいた。当然のようにそこにいた。

しかし今日は、二ヶ月ぶりに彼女がいない。

彼女がここに存在しない。

もしかしたら先に帰っているのかも　という一縷の望みは、完全に裏切られた。玄関も、廊下も、その奥の居間も完全に真っ暗だ。真っ暗で静かだ。一目でそこに誰もいないことが分かるくらいの暗闇と静寂だった。

あれから亜紀雄は、一時間校舎中を探し回り　一時間学校中を探し回り　一時間学校の近所を探し回り　一時間通学路を探し回った。

しかし、スズランはどこにもいなかった。

しかも探し回っているうちに、リーネのことまで見失ってしまったのだった。

最初教室で問い詰めてみたが、リーネは思わせぶりな表情のままシラを切るばかりで、何も答えてくれなかった。そして何も言わずに教室から出て行ってしまった。後を追いかけて廊下に飛び出したが、そこにはもうリーネの姿はなかった。風のように、あるいは霧のように、リーネは忽然と姿を消してしまったのだ。

何でリーネがあんなことを言ったのか、分からない。

何でスズランがいなくなったのか、分からない。

どこにスズランがいるのか、分からない。

どうすればいいのか、分からない。

分からない、分からない。

分からないままガムシヤラに探し回ってみたが、結局見つからなかった。四時間探し回っても見つからなかった。手がかりすら見つからなかった。

そして家の近所の商店街を走り回っている最中に急に立ちくらみ膝に力が入らないことに気付いて、亜紀雄はようやく自分の体力が限界に到っていることに思い至ったのだった。

とりあえず家で空腹を満たして、少し休んでからもう一度探そう。そう、そうだ。もしかしたらあれはリーネの悪ふざけで、スズランは先に帰っているのかもしれない。

そんな思考に至り、亜紀雄は家に帰ったのだったが、

やはり、スズランは帰っていない。

亜紀雄は力の入らない足を無理矢理動かしながら、自分の家の暗闇の廊下を、リビングに向かって進んでいく。

考えてみれば、これが元々じゃないか。

スズランが来る前は、これが当たり前だったじゃないか。

高校に入学し、この広い家で一人暮らしをするようになってからは、この暗闇の玄関も、暗闇の廊下も、暗闇の部屋も、毎日目にするものだった。見飽きるほど目にしたものだ。これが当たり前

だった。

確かに、亜紀雄が中学二年の頃までは、この家で両親と弟と共に暮らしていた。どこにでもいる四人家族の一般家庭の一つとしてあるいは比較的恵まれているような状況で暮らしていた。

しかし、亜紀雄が中学三年に進級する春 すなわち亜紀雄の弟が小学校から中学校へ上がる時期になって、生活が一変した。

亜紀雄の弟 鞆河望のそむは、俗に言う『天才児』だったのである。

小学生の時分から私立の有名校に通い、そこでもさらに逸脱した成績優秀。中学に進学するにあたって、世界的名門の学校を紹介されたのである。

亜紀雄の両親もそれに乗り気で、父親はそれに合わせて転勤を会社に申し出、運良くこれを通った。望の私生活の面倒も見なければならぬということ、母親も同行することになり、家族四人揃ってアメリカに引越すことになったのである。

しかし何の才覚もない亜紀雄にとっては、この転校が至極ハードルの高いことだったことは言うまでもない。

英語で生活するだけでも大変なのに、その英語で授業まで受けなければならぬのは困難を極めた。亜紀雄は望とは違い近所の一般的な高校に入学したのだが、それでも勉強についてはいけなかった。結局一年後、亜紀雄だけが日本に帰ってくることになったのである。

元々天才である弟と比較され続け、自分を卑下することに馴れ親しみ、あまつさえ『歩くマイナス極』とまで呼ばれていた亜紀雄には、これは決定打となった。

自分は敗者、愚者、負け犬、無力、無意味、無価値、不毛、不必要 そう思い知り、認識し、認証し、確証を得るには十分な出来事だった。

両親の期待に應えるどころか期待すらされず、しかも単なる予定や予想や予測すら裏切ってしまった。負担をかけた。迷惑をかけた。

ここまで恥を晒しておいて、それでもものつうと生きていて、一体自分は何なんだろうか？ 何様なんだろうか？

今までずっと嘲笑され続けていた。

今までずっと侮蔑され続けていた。

今までずっと否定され続けていた。

自分が生きる意味が分からない。

生き続けている意味が分からない。

自分が存続している意味が分からない。

自分の存在価値が見えない。

自分の存在理由が見えない。

自分の存在意義が見えない。

アメリカでは、両親と弟の三人で和気藹々と暮らしている。未来に期待して生きている。輝かしい未来を目指して生きている。

しかし、自分はこの暗く静かな家で、一人侘しく生きている。

当然だ。当然で当然で当然なことだ。予定を予想を予測を裏切り、負担をかけて、迷惑をかけて、それ以上に自分は何を求める権利があるというのだろうか？ 何を望んでいいというのだろうか？ 何を願っているというのだろうか？

自分は一体何を考えて生きていけば

と、ここで亜紀雄はふつと気付いた。

今日は、このネガティブな逡巡が切れない。止まらない。停まらない。やけに長い。やけに永い。やけに不快で、やけに深い。やけに苦しい。

そうか、これもスズランがないから。

思えばこの二ヶ月、この後ろ向きな思考をいつも遮っていたのはスズランだった。悩む暇もないくらい、スズランは何かしらを引き

起こしていた。部屋の中でドラを鳴らしたり、人の弁当を盗み食いたり、男子を大人数手玉にとつていたり。そんなことを引き起こし、考える暇も与えてくれなかった。

だが、そんな日々ももう終わりかもしれない。

スズランがいなければ、部屋の中でドラが鳴り響くこともないし、毎朝通勤ラッシュに巻き込まれるし、昼食は購買の弁当に戻るし、色恋沙汰で右往左往することもない。そんなアクシデントに巻き込まれることはなくなる。なくなる代わりに『歩くマイナス極』はさらなる負のベクトルへと進んでいく。

廊下を渡り、階段を登って、いつの間にか亜紀雄は二階にある自分の部屋にたどり着いていた。

スズランが来てからやたらきれいになったフローリングの部屋。整頓された棚。きちんとメイキングされたベッド。塵一つ落ちていない床。透き通るようなガラス窓。

もしこのままスズランがいなくなったら、この部屋もまた元通りになってしまうのだろうか。

亜紀雄は崩れ落ちるように、床の上にどすんと倒れこんだ。もう、足に力が入らない。

上体を上げようとして床に腕をついたが、体が持ち上がらなかった。手にも肩にも腕にも、力が入らない。

これは走り回って疲れたから？

空腹だから？

それとも、スズランがいらないから？

亜紀雄は眠りに落ちるよつに、墮ちるよつに、静かにまぶたを閉じた。

#### 第四話「転校生」 その三

亜紀雄は眠りに落ちるように、墮ちるように、静かにまぶたを閉じた。その瞬間、

ふわっ

頬に風が当たった。

亜紀雄は驚いて顔を上げる。

自分は部屋の中にいる。空調は何も点けていない。そして窓もベランダのガラス戸も完全に閉まっているはず。この空間に風が巻き起こるはずがない。

そう思いながら亜紀雄は目を凝らし、風を感じた方向。ベランダの方を見やった。

窓から差し込む月明かり。ゆらゆらと揺れるカーテン。半開きのガラスドア。そしてそこに佇む一つの影。よく見ると、それは

小麦色の散切り頭、高校の制服をまとった女の子。

「す、スズランッ！」

亜紀雄は起き上がり、影の方に駆け寄った。

「ど、どうしたんだ、スズラン？ 帰ってきたのか？ っていうか、どこに行ってたんだ？ というか、リーネさんが変なこと言って、君が帰ってこないなんて言うから」

「申し訳……ありません……せん……亜紀雄様」

スズランはサッシに手をかけ、床に片膝をついた姿勢で、息も絶え絶えに答えた。

その苦しそうな声にいぶかしみ、亜紀雄は改めてスズランの姿を見る。



き、

「……そうですね。家臣ならば主に隠し事などもつての他。きちんとすべて説明せねばなりませんね。……分かりました。時間もありませんし、手短かに説明させていただきます。まずはどこから

そうですね、まだ亜紀雄様には精霊というものについて、お話ししておりませんでした。私は樹脂製人形に宿り人間界を生きている精霊ですが、精霊というのは各々、天命あるいは属性のようなものを持っております。それは自然に起因するもので、例えば草木や風、水などを育み愛しむことを存在意義としているのです。それは私も例外ではありません。私にも司るものがあり、それはすなわち

死です」

「……………死？」

「はい。私は死の精霊。草木を枯らし、動物を息絶えさせることが私の使命。三百年前まで、私はこの世を歩き回り、周囲のすべてに死を与えて続けておりました」

スズランの説明に、亜紀雄は黙り込んだ。

「当然のごとく、死とはすべての生きとし生けるものが忌み嫌うもの。私自身、嫌われ、疎まれ、恐れられていました。しかし当の私は、ただ天命に沿って動いているだけなので、そのような周囲の感情を意に介することもなく、ただ黙々と周囲を殺して回っております。孤立しながらも、それを気にすることなく、死を与え続けておりました」

亜紀雄は話を聞きながら、スズランの顔を見つめている。

「当然、この『死』に抗おうとする者は少なくなく、私に対して力に訴えてくる者さえいました。そのような者が現れるたび、私は傷つき、それでも死によって彼らを滅ぼし、しかし傷が癒える間もなくまた攻撃を受け、それに対抗するように死を与えて、という日々を送っていました。今思えば、ひどく虚しい日々を送っております。しかし三百年前、私に転機が訪れました」

亜紀雄は少しずつ、顔を俯けていく。

「亜紀雄様の五代前の当主　　鞘河隆久様によつて、私は人間界に呼び出されたのです。……これはまったくの偶然でした。隆久様が部下に精霊を降ろす術を教わり、実際に試してみたのだそうです。そうしたら偶然、私のようなはぐれ者が降ろされたのです」

亜紀雄は無言。

「私も、当時の人の世のことは少なからず知っておりまして。そして当時の人間界では戦が耐えなかったことも……。降ろされた精霊は、降ろした主の命に従うことが必定。そして私の能力は『死』。ですから、隆久様は私を戦の前線に立たせ、敵軍を殺して回ることを命じるものだと思っております。しかし隆久様はそのようなことは一切せず、私をいち家臣として側に置いてくださいました。道具ではなく、一己の存在として扱ってくださいました。私に声をかけ、私にものを尋ね、私の話に耳を傾け、頷き、そして私に笑いかけてくださいました」

亜紀雄はただ、無言。

「そこで私は、生まれて初めて心が安らかになるのを感じました。そしてそれと同時に、自分の心が今まで荒みきっていたことをようやく知りました。それまでの日々が苦しいものだったことに気付きました。悲しかったことに感じました。誰かに必要とされ、誰かを必要とし、誰かと共に生きていくこと。それがこんなにも心安いものであることを知り、またそれが私の願望であることを知りました。私の幸せであることを知りました。そしてそれを教えてくださいました。隆久様に、深く深く感謝いたしました」

亜紀雄はただただ、無言。

「隆久様にご病気で床に伏した折、その一瞬の混乱について東本家の者が私に襲い掛かり、あえなく私は精霊界に封じられてしまいました。が、封の効力が切れるまでの三百年間、私は隆久様への恩を返すことばかり考えておりました。そして封が切れた瞬間、私は再度人間界に降り　　あなた様の元へ向かったのです」

ここまで言うのと、スズランは口を閉じた。

さつきまでずっと無言で話を聞いていた亜紀雄は、ここでようやく口を開き、

「……今君を襲っているのは、つまりその『東本家』のやつなの力？」

「そうです」

スズランは静かに首を縦に振った。

「彼らは、人間に害を与える精霊に制裁を加えることを生業としております。そんな彼らには、私のような存在は存在しているだけで恐ろしいもの。この上ない危険因子なのです。恐らく私の封がこの時期に切れることは一族で伝えられていたのでしょう。だからこそ、私が人間界に再度降り立ってからふた月という短い期間で私を探し出し、私を消そうと動き出したのです」

ここでようやく、亜紀雄は合点がいった。

スズランを追い詰めている存在、東本家　　つまりはあの転

校生、東リーネがその黒幕なのだろう。最初亜紀雄が彼女の世話係を命じられたのは偶然だったはず。しかしその後、彼女はやたら亜紀雄とスズランに話しかけてきた。絡んできた。つかかかってきた。

おかしいとは思っていたんだ。

つまりは、東リーネは最初からスズランに目をつけ、スズランとそれに近い存在である亜紀雄に近づいてきたのだろう。そして二週間ほど観察した後　　つまりは今日、動き出したと、そういうことなのだろう。

「……じゃ、じゃあ、どうする？　勝てそうにないの力？　だったら、逃げるしかないナ。とりあえず待つてくれ。荷物をまとめて、

あとお金も　　」

「なりません」

スズランは首を横に振った。

そして亜紀雄にしなだれるように近づいてきて、腕を肩にかけ、額を胸に当てて、抱きこむように体重をかけてきた。それが人形だとは信じられないくらいに柔らかく温かな感触が、服を伝わってく

る。

「危険です。亜紀雄様を危険に晒すなど、隆久様に申し訳が立ちません。亜紀雄様はここに留まっていてください。決してここから動かないでください。彼らの標的は私のみ。私が離れていれば、あなた様に危険が及ぶことはないはずです」

亜紀雄を抱えるスズランの腕に、ぎゅっと力が入った。

「……恐らく、私はこの世から消滅するでしょう。三百年前は何か封じられるのみで助かりましたが、今度の相手は比べ物にならないほどの手練です。私が人間界は愚か、精霊界からも消えてなくなることはもはや避けられません。僅かしかあなた様にお仕えできず、申し訳ありませんでした。この二ヶ月、恐縮ながら大変楽しい日々を過ごさせていただきました。これからあなた様のお世話をできないことは心残りですが、後悔は何もありません。私が消え去った後も、私の心は常にあるかと共にあります。どうぞご自愛くださいませ。それだけが私の願いです」

透き通るような声でそこまで言うと、スズランはゆっくりと腕をほどいた。

そして亜紀雄に、毎朝出かける間際に見せていた愛しむような微笑を見せ、

「さようなら」

そう言った瞬間、ぶわつと風が巻き起こった。

亜紀雄が驚いて目を閉じ、そして再度目を開けると、

もうそこには、誰もいなかった。

## 第五話「逡巡」

僕に出来ることなんて、この世にいくつあるのだろうか？

今この時、スズランのためにできることなどあるのだろうか？

一つ以上あるのだろうか？

一つでもあるのだろうか？

あるだろうか？

「ある」という返答への肯定が

「ない」という返答への否定が

あるだろうか？

あるだろうか？

あるだろうか？

………。

………。

………ない。

あるはずもない。

今まで一つだって、あつた試しがない。

スズランのためにできたことなんて、僕には何一つなかった

んだ。

スズランのためにできることなんて、僕には何一つないんだ。

分かっていた。

分かっていた。

分かっていた。

スズランに比べて、僕は無価値。

スズランにとって、僕は無価値。

スズランに比べて、僕は無意味。

スズランにとって、僕は無意味。

誰にとつても、僕は無価値。

誰にとつても、僕は無意味。

僕の存在意義など皆無。

ここにいるのは僕でなくてもいい。

だったら、なぜ僕は生きているのだろうか？

なぜ僕は、わざわざ生きているのだろうか？

分かっている。

分かっている。

分かっている。

僕がくだらないから。

僕がくだらない存在だから。

無価値だから、無意味だから。

だから、

そんな僕を慈しみ愛しむものなど、何も無い。

無い。

無い。

無い。

あるはずもない。

輝かしい微笑の裏側で、毒づかれていたこと。

友情や愛情だと信じていたものが、完全なまやかしだったこ

と。

人一倍の好意で接してみたが、拒絶されたこと。

そんな経験など、数え切れないほどある。

多すぎて数えていないだけ。

そう、結局

自分を救うのは自分だけ。

自分が救うのは自分だけ。

自分を救うのは自分だけ。

自分が救うのは自分だけ。

自分を救うのは自分だけ。

自分が救うのは自分だけ。

スズランとマイナス

……  
……  
ただ、それだけだ。

## 第六話「来訪者」 その一

あれから、どれくらいの間が経っただろうか？

部屋は真つ暗なまま。カーテンだけが夜風にそよいでいる。ベランダの扉は開け放したままで、彼方から犬の遠吠えが聞こえてきた。亜紀雄はゆっくりと立ち上がった。

暗がりの中、目を凝らして壁にかかっている時計を見ると、十一時。放課後の掃除が終わったのが確か夕方五時頃。それから四時間スズランを探し回り、家に帰った直後に、ここでスズランに遭遇した。

つまり、ここで一時間以上呆けていたのか。

とりあえず亜紀雄はベランダの扉を閉めて、冷たい夜風を遮った。………恐らく、ここに来る来訪者はもういない。もう現れない。そう思った。

活動を再開したはいいが、しかしまだ頭の整理がついていない。これからの指針は立っていない。亜紀雄は考えもなしに、半ば条件反射のように部屋を出た。

廊下に出ると、キンコーンというチャイムが絶え間なく鳴っている。その音の鳴る間隔からして、遠慮が微塵も感じられない。まるで亜紀雄がここにいることが最初から分かっているかのように、催促するようにやかましく響いている。

そうか、意識が戻ったのは、この音のせいか。

亜紀雄は嘆息しながらトントンと階段を下りていった。そして一階の廊下の壁に備わっている玄関のモニターを覗き込む。

そこに映っているのは、ポニーテールの女子生徒。

鮮明な画像ではなかったので、最初はそれが誰なのか分からなかった。まじまじとその人物の挙動を観察し、見知った顔を一人一人当てはめていって、亜紀雄はようやく思い至った。

「………花塚さん？」

この髪型と割合小柄な体軀は、同じ体育委員の所属する一年生、花塚まいみだ。

何でウチを訪ねてきたんだ？

彼女は別に、亜紀雄とそれほど親しいわけではない。委員会の時に、席が隣だからという理由で話す程度。あるいは時折、廊下ですれ違った時に声をかけたりするが、しかしそれだけだ。

「……何の用だ？」

亜紀雄は首をかしげながら、玄関に出向き、チェーンを外してドアを開けた。

扉の奥から顔を出したまいみの第一声、

「も〜、いるんなら早く出てくださいよ！」

「え？ いや、ごめん……」

亜紀雄はぼかんとしながら謝った。

「……というか、どうしたの、こんな時間に？ 何の用？」

「これです」

そう言って、まいみは一枚のプリントを差し出してきた。

渡されるままに受け取って、亜紀雄はそこに書いてある文字を読む。そこには「体育委員仕事分担当表・訂正版」と書いてあった。

「今日の放課後、村雲先生に渡されたんです。なんかミスがあったみたいで、直したから他の一年生の体育委員にも渡しとけて。しかも鞘河君とこのクラス、変更のせいで明日の朝、校庭ラインメーカー係が増えてたんですよ。だから今日中に渡さなきゃと思って、こうしてわざわざ持ってきたんです。あなたの友達に家の場所聞いて。これ渡しそびれてたら、明日鞘河君が怒られてたんですから、感謝してくださいよ？」

「あ、うん。ありがとう」

「あと、三組のもう一人の体育委員はスズランさんだったけど、一緒に住んでるんでしょう？ なら、これで問題ないですよ」

まいみの言葉の途中、その「スズラン」という単語に呼応するように、はらりと、亜紀雄の手からプリントが滑り落ちた。

亜紀雄はハツとして、慌ててしやがみこみ、

「あ、ごめん」

とプリントを拾った。

まいみは、亜紀雄のその腑抜けたような、気の抜けたような仕草にいぶかしんだ視線を向け、

「……………？ どうしたんです？ 何か、変ですよ？ 何かあったんですか？」

「え？ いや、まあ、なんというか……………」

亜紀雄はしやがみこんだまま、地面に視線を落として、

「その、まあ……………色々あつてネ。その……………スズランはいないんだ。いなくなったというか……………帰っちゃったんだよネ。その……………彼女の両親のところ。だから、体育委員も僕一人つてことになっちゃつて……………あ、いや、そんな深刻なことじゃなく、その、家庭の事情で仕方なくというか……………」

「嘘ですね」

腰に手を当て、まるで諭すようにまいみは言い放った。

「その『仕方なく』っていうのは嘘です。『仕方なく』ではありません。鞘河君が何もできなかったから……………いえ、何もしなかったから、スズランさんはいなくなっちゃったんじゃないですか？」

「……………へ？ いや……………何を言ってるんだ？ 別にそんな……………深刻なことじゃなくて、本当に……………」

「隠したって無駄です。顔を見れば分かりますよ。……………まったく、前々から思ってたんですけど、前々から言っていましたけど、鞘河君って本当にウジ虫ですよ。ウジウジウジウジ。ウジ虫以上のウジ具合ですよ。ウジウジ界の世界チャンピオンです。もう少し何とかできないんですか？ そんなんだから、いつでもどこでもなーんにもスズランさんもいなくなつて……………」

「う、うるさいっ!」

亜紀雄はがばつと立ち上がり、吐き捨てるように叫んだ。

「な、なんだよ、いきなり! 人を真つ向から否定して! 何も事情を知らないくせに! さっきまで僕がどれだけ必死に走り回ってたか知らないくせに」

「知ってますよ、『歩くマイナス極』さん」

まいみの平然とした返答。

その冷たく苦しく狂おしい声音と響きに、亜紀雄は思わず下を向いた。

「知ってます、知ってます、ゼーんぶ知ってます。分かっています。鞘河君の傾向は。鞘河君の意向は。鞘河君の心の中は。まったくもう……過去に失敗したから、自分を否定されたから、否定されたのが怖かったから、だから自分で自分を否定してしまえばいいなんてホント考えなしです。無価値です。無意味です。逃げてるだけじゃないですか、そんなの。裏切られるのが怖いから、否定されるのが怖いから、失敗するのが怖いから、だから自分の未来に期待をしない。そうやって生きていて、一体何ができるって言うんです? 一体何が守れるって言うんです? 一体誰のことを守れるって言うんです?」

まいみは、亜紀雄の記憶を見透かすように言葉を続ける。

「一番タチが悪いのが、自分でネガティブだと分かっているながら、それでもそれを変えようとしなくていいことです。その生き方が決して幸せになれるものじゃないことも、自分の理想じゃないことも、自分の望むものじゃないことも、全部分かっている。分かっているくせに、それを変えない。怖いから、怖いから、怖いから、変えられない。いえ、変えられないと思っ込んでいます。変えられないと信じ込んでいます。変えられないと自分に言い聞かせています。そんな生き方が不毛じゃなくて、一体何だっけって言うんです? そんな生き方が不憫じ

やなくて、一体何だつて言うんです？」

まいみは、亜紀雄の思考を見透かすように言葉を続ける。

「いい例が、そう、鞘河君が今もまだここにいてるってことです。何もせず、ただここに立ち尽くしていることです。……あなた、一体何してるんですか？ 『僕には何もできない』なんて、そんなのはただの言い訳です。屁理屈です。戯言です。『何か』をしなければならぬんじゃないんですか？ 今すぐやらなければならぬんじゃないんですか？ 何であなたは今も、こんなところにいるんですか？ こんなところでつつ立つてるんですか？」

まいみは、亜紀雄の心を見透かすように言葉を続ける。

「少なくとも、スズランさんといたときの鞘河君は正直でした。誠心誠意、スズランさんの言動にツッコんでいましたよ。……いえ、これはバカにしてるわけじゃありません。納得してるんです。感心してるんです。感動してるんです。内側でごちゃごちゃ呻いているあなたが、悩んでるあなたが、言い訳してるあなたが、こんなに誠実に真面目にしゃべっているなんて、怒っているなんて、笑っているなんて。傍から見ててそう思いました。納得しました。感心しました。感動しました。……鞘河君、スズランさんという楽しかったんですよ？」

亜紀雄は首肯。

「スズランさんに大切にされて嬉しかったんですよ？」

首肯。

「スズランさんと一緒にいて幸せだったんですよ？」

首肯。

「スズランさんと一緒にいたいと思ってるんですよ？」

首肯。

「スズランさんを大切にしたいと思ってるんですよ？」

首肯。

「スズランさんが傷つくのは見たくないんですよ？」

首肯。

「スズランさんが苦しむのは見たくないんですよ？」  
首肯。

「スズランさんが悲しむのは見たくないんですよ？」  
首肯。

「スズランさんがいなくなるのは嫌なんですよ？」

亜紀雄は、首肯。

「……………だったら、鞆河君が今どうするべきか、分かりますね？  
分かってますね？ これ以上、何も言う必要はありませんね？

……………では、これは鞆河君とスズランさんのことです。から、  
君と彼女のお話ですから、外野たる私はここで退場します。じ

やあ 頑張ってください」

微笑みながらそう言つと、花塚まいみは玄関を出て、扉をばたんと閉めた。

ドアの向こう、石段を歩く足音も遠のいていく。

しばし玄関口に独り立ち尽くしていた亜紀雄は、おもむろに手の  
甲で頬を拭い、そして顔を上げて

前を向いた。

## 第六話「来訪者」 その二

午前零時を回り、もう終電も残っていないような時間。亜紀雄は高校にいた。

これには、別に根拠があったわけではない。ここにスズランがいるかもしれないという予見が立っていたわけではない。むしろ、先刻一時間ほど探し回っても見つからなかった場所だ。選択肢から外す方が普通である。

しかし亜紀雄は、なぜか「ここにスズランがいるのでは」と思った。

根拠などなく予見でもなく、ただ何となくそう思ったからというだけ。感じたというだけ。それだけの感覚をもとに、亜紀雄はここをやってきたのだった。

当然のごとく、校門は施錠されている。

学校の外周。亜紀雄はあまり人目につかない場所を選んで、塀を乗り越えた。身長の数くらいはある石塀で、おまけに手をかけるところも申し訳程度しかなく、飛び越えるのはなかなか難しかったが、手を擦りむきつつ膝を擦りむきつつ、亜紀雄はどうにか学校の敷地内に入り込んだ。

校舎に向かって駆けていく間、ふと顔を上げると、その屋上に人影が見えた。人影が動いたような気がした。

遠い上に暗くて、それは確証を持って言うことではないが、しかしそこに何かがいる。誰かがいる。誰かが動いている。

亜紀雄は眉をひそめた。

誰だろう？ 何をしてるんだろう？ こんな時間に、あんな場所に、人がいるなんて、人が活動しているなんて

亜紀雄が疑いを抱くには十分すぎる根拠だった。

まずは建物内に入ろうと、亜紀雄は校舎の玄関口に向かった。が、やはりドアはすべて閉められていて、鍵がしっかりと掛かっている。

ガラスを割るのは最終手段と思いつつ、周囲の窓を一つ一つ確かめていって、亜紀雄はようやく一つ、鍵を掛け忘れていた窓を発見した。

ガラガラと窓を開き、亜紀雄は早速そこからゴソゴソと這うように建物の中に入る。

深夜の学校。灯りのない廊下。

怪談話が創生されるのも領けるほど、不気味な雰囲気や漂わせていた。今にも火の玉が浮かんできそうな背景。その静寂の中、トタツという靴下でタイルを踏む音を鳴らしながら、亜紀雄は廊下を進んでいく。

目指すは屋上。

上階を目指すなら、階段を登らなければならない。屋上へ向かうと、亜紀雄は当然のごとく階段を登り始めた。

暗闇の中、つまずかないように一段ずつ登っていく。

登るごとに屋上に近づくごとに、一体屋上に何がいるのか、スズランはいるのか、あの人影は何をしていたのか、スズランは何をしているのか、スズランは無事なのか、その推測と推論と困惑と混乱を繰り返しながら、この後の展開への期待と緊張を抱え、一階、二階と通り過ぎ、そして二階と三階の間の踊り場に到達したところで

いきなり、冷風が吹き荒れた。

「うわっ？」

冷たい、というより痛いという感覚が肌を伝わる。顔、首、手

露出部分全体が痛覚と化した。

亜紀雄は反射的に顔を腕で庇った。が、顔は守られても今度は腕に痛みが突き刺さる。まるで防御になっっていない。

これは攻撃なのかトラップなのか、誰の仕業なのかどんな技なのか、と亜紀雄が思考を巡らしていると、

風はすぐに止んだ。

まるで「これはただの威嚇」とでも言うような短時間。

そろりと目を開け、風上の方へ視線を動かすと、そこに立っていたのは長身の男。白髪、白い肌、真つ白なワイシャツとジーンズ。

冷め切った青白い目で、亜紀雄を眺めている。

「な、何だ？ 君は……」

「主……の命により、お前をとおせんぼする」

白い男は無感動な目を亜紀雄に向けながら、抑揚のない声で答えた。

亜紀雄は険しい表情を崩さないまま、

「……君の主っていうのは」

「私デスよ」

突然、聞きなれた女性声。

声が出た方を向くと、白服男の左、屋上へ続く階段から一段一段降りてくる、ブロンズヘアの女子生徒。うっすらと笑みを浮かべながら 東リーネが現れた。

「アキオ、どうしたんデスか？ こんな時間に、こんなところで？」

「しらじらしいことを言うナ！ 分かってるんだ！ お前がここに  
いるってことは、スズランもここにいるんだロ！」

「ウフフン。なるほどなるほど、そうデスかそうデスか」

リーネはやれやれと言わんばかりに首を横に振り、

「まったく……アキオ、まだ諦めてなかったんデスか？」

「あ、諦めるわけないだロ！」

亜紀雄は叫ぶ。

「お前、スズランをどうしようっていうんだヨ！ 仕事だか生業だ  
か知らないけど、そんなこと許すわけないだロ！」

「アナタの許しなんか、別に関係ありません。これは東家の使命な  
んデス」

「な、何が使命ダ！ 何でスズランを消そうとするんだ？ お前だつて、スズランを二週間近くで見てたんだ口？ だったら分かるだ口？ 今のあいつに、危険なところなんて一つもない！ 消す必要なんてないだ口！」

「分かってませんね〜」

リーネは手の平を上に向けながら、疲れたようなため息をついた。  
「スズランさんにそういう能力がある以上、危険なことには変わりないんデス。今がどうでも、それは関係ないんデスよ」

「それはどういう」

「これは仮定の話デスが、あくまで仮定の話デスが、例えばスズランさんがアキオに恋愛感情を抱いたとしまシヨウ。スズランさんとアキオが真正銘の恋人同士になったとしまシヨウ。これは、人間と精霊の種族を超えた愛の物語 なんてキレイ事では済まされないんデスよ。そんな状態で、もしアキオが誰かに傷つけられたとしたら、どうなりますか？ 殺されたとしたらどうなりますか？ スズランさんはどうするでシヨウか？ …………… 明白デス。明らかデス。彼女は自分の精霊としての能力を使って、必ずや敵討ちをする。あなたの仇討ちをする。そう、スズランさんは 人を殺すはずデス」

リーネはりんとした声で説明を続ける。

「精霊による人殺し 　これを止めるのが、私たち東家の使命なのデス。人間は人間に裁かせる。それ以外の余計な混乱を起こさない。そうやって人の世を守るのが、我々の仕事。………… しかもスズランさんは、封が途切れた瞬間、一目散に人間界へ舞い戻ってきてまシタ。彼女は人間界にしようとスル。だから、彼女の存在は極めて危険なのデス」

「で、でもそれは仮定の話だ口！ 僕とスズランが恋人にだなんて  
」

「残念ながら、これはそれほど低確率な話ではないんデスよ。私はアナタ方を二週間見てマシタ。アナタ方のことを二週間、近くで観

察させてもらいまシタ。そして分かりマシタ。確かに、今のアナタ方はそんなロマンチックな関係ではありませんね。スズランさんが好き勝手やって、それをアナタが止めて。その繰り返しデス。その繰り返しでしかありません。……………でも、オカメハチモクつていっんですか？ もしかしたらあなた自身も分かっているのではないデスカ？ 私には、そういう兆候が見えマシタ。私には確認できマシタ」

「……………ちよう……………こつ……………？」

「日ごとにその確率は大きくなっていく。だから、歯止めが利くうちにそれを止めるのデス。アナタ方のために、今のうちに止めるのデス。止められなくなる前に、止めるのデス。お分かりいただけましたか？ ………………では、理解できたなら、そのままそこで動かさないで」

「わ、分かるわけないだ口！」

叫び声と共に、亜紀雄は睨むような目つきでリーネを見据える。

「将来のことなんて知らないけど、知ったこつちやないけど、今でも、僕とあいつは主と精霊なんだ！ すでにそういう絆は」

「主？」

リーネは、尻上がりのイントネーションで聞き返してきた。そして亜紀雄にあからさまな嘲笑を向け、

「ウフフ、ウフフフフ。アキオ、どうやらアナタは、まだ『精霊』というものに関して、十分理解できていないようデスね。残念ながらアナタは、スズランさんの本当の主ないのデス。実質的な主ではありません。アナタ方二人には、今のところそういう関係性はないのデスよ」

「……………は？ 何を言ってるんだ？ あいつは僕に仕えてるってことだ口？ 僕はともかくとして、あいつはいつもそういう表現をしていタ。僕があいつの主じゃないなんて、何を根拠に」

「根拠デスカ？ 根拠ならちゃんとあります。ありますよ。そう」

アナタが今まで、ここにたどり着けなかったことデス。

私とスズランさんは、アナタがこの学校を出てからずっとここにいまシタ。六時間ここにいまシタ　まあ、一度逃げられたりもしたのデスが　しかしその間、アナタはここにたどり着けなカッタ。スズランさんはここににいるのに、それを探し出せなカッタ。それが根拠デス」

「そ、それはどういう」

「ふう……少し話し過ぎましたね。私は早く職務を遂行しなければ。では、私はこれで失礼します。……正直なところ、私はアキオの、その周囲のすべてと距離をとっている生き方は、案外気に入っているのデス。クールなのデス。私の好きなタイプだったりするのデス。できれば私は、アナタのことは傷つけたくない。……だからあまりこのユネアに抵抗しないでくださいサイね？　お願いします」

そこまでいうと、リーネはくるりと制服のスカートをひるがえしながら振り返り、何も言わずに階段を登っていった。

それを追いかけるように、

「ま、待つて」

と亜紀雄が前へ駆け出した瞬間、

ブオッ

冷風が吹き、亜紀雄はそれ以上進めなくなった。

「この……先には、行かせない」

そう呟きながら、白髪で上背の男　ユネアは、亜紀雄に向かって右手をかざす。その手の平からは、寒風が吹き続ける。

「これしき……」

顔を腕で覆い、体勢を低くしながら、亜紀雄は風に抗うようにジリジリと前へ進んでいく。

しかしユネアは相変わらずの無表情で、

「無……駄」

呟くように言いながら、左手を振り上げた

その手の中に

現れる、氷の刃。

「恨……むな」

呟きと共に、ユネアはその青白い円錐を亜紀雄に向かって投げつけた。

風で加速され、亜紀雄の腹部に向かって一直線に向かう刃。

その切っ先が服にあと二センチと迫ったところで

がちゃんっ

その氷刀は勢いを殺され粉々になって、床に落ちた。

その予想外の事象に、弱まる冷風。

亜紀雄が驚きながら、首を右に回すと、そのすぐ横に現れた人影

「おやまあ、面白いことになってるね」

氷のつららを叩き落した右手の甲をさすりながら、突然現れたその男は、皮肉な笑みを亜紀雄に向けた。

「こ、小林君！」

いつも見慣れたクラスメイト、東加々美といつもつつかかり合っている人物、黒髪を耳元眉下までのばした男子生徒 小林雑音

に、亜紀雄は驚愕の表情を返す。

「……な、何で小林君がこんなところに？」

「いや、おもしろそうな予感がしてね」

口元を歪めた笑みを亜紀雄に向けながら、雑音は軽い調子で答えた。そしてじつとこちらを睨みつけている白男、ユネアへと視線を移し、

「そうだね。まあ……この前のお礼もあるし、ここは僕が何とかしてあげるよ」

「小林君が？ あいつを？ で、できるの？ ………………というか、

お礼って、僕、小林君に何か感謝されることってしたっけ？」

「い、いいんだよ！ 君はとにかく屋上に行けば！ ほら！ 手遅れになる前に！」

「ええっ？ あ、うん……」

いきなり怒られ、戸惑う亜紀雄。

困惑しつつも、言われるままに促されるままに、亜紀雄が屋上への階段へと駆け出そうとしたとき、

「あ、ちよつと待った」

雑音が亜紀雄の腕を掴んだ。

「な、何？ 小林君」

「これ、これ持ってた」

そう言って、雑音は亜紀雄に一枚の紙切れを握らせた。

亜紀雄が何だろうと思っただけで持ち上げると、それは縦長の白い紙に赤い文様を書いてあり、真ん中には草書で（読めないが）文字と思われるものが書いてある。神社でもよく見かける、ステレオタイプなお札のようなものだった。

「……え？ これは？」

「見たまんまのお札だよ。これを精霊の急所に触れさせれば、精霊界に返すことができる」

「え？ そうなの？ ……というか、精霊って、小林君」

「ほらほら、早く行きなつて。手遅れになる前に」

雑音は払うように手を振った。

亜紀雄は何一つ理解できていなかったが、お札を握りなおし、とにかく登り階段へと走っていった。

タタタツと、亜紀雄はユネアの横を通り過ぎる。

しかしユネアは反応しない。亜紀雄にも一定の意識は向けているが、顔をそちらに向けることもせず、動かずに、じっと 雑音の方を睨んでいる。

亜紀雄は階段を登りきり、ドアを開けて屋上へと行ってしまった。ボタンツ、とドアが閉まる音。亜紀雄がこの空間から消えたところ

るで、ようやく

「お前……何者？」

ユネアが言葉を発する。

雑音は、その質問にふふんと笑いつつ、

「察しの通り、邪魔者だよ」

「ふん」

ユネアは鼻で笑った。

「邪……魔？ 氷刀を見切ったところからも、お前がそれなりに嗜んでいることは分かるが、しかしそれだけで慢心するのは早いぞ。

そんな丸腰で、俺の能力に抗えるとも思っているのか？」

「丸腰？ 別に丸腰じゃないさ」

雑音は首を傾け、茶化すような笑みで答えた。

「お前……に、一体何が」

と、ユネアが言いかけたところで、ふいに遠くから風を叩く音が聞こえてきた。

バサンツ。

バサンツ、バサンツ。

バサンツ、バサンツ、バサンツ。

バサンツ、バサンツ、バサンツ、バサンツ。

バサンツ、バサンツ、バサンツ、バサンツ、バサンツ。

その音は段々大きくなり、やがて雑音の左側、踊り場の壁の上方にある、小さな窓に黒い影が現れた。

閉め忘れたのだろう、半分だけ開いているガラス窓。

その影は窓をくぐると、再度風を叩いて雑音の方に近づいていき、

そして雑音の右肩に止まった。

窓から差し込む月明かりに照らされたその影は

暗黒色のくちばしに短刀をくわえた、やたらに大きなカラスだった。

「……つたく、何でお前はこうも突発的に俺を使っただ？」

「悪いとは思ってるよ」

肩の上でしゃがれ声の言葉を発したそのカラスに、雑音は苦笑を返す。

そのカラスは反目で雑音を眺めながら、

「ほれ、小僧。持ってきてやったぞ」

「さんきゅー、ストロウ」

カラスがくちばしを開けると同時に自由落下を始めたその短刀を、雑音はすたとんと右手で受け止めた。

「お……前」

突如現れた人語を話すカラス　ストロウを眺め、ユネアはいよいよ顔に警戒色を示す。険しく厳しい表情。やや体勢を低くし、前屈みになって、明らかな臨戦態勢をとった。

その雰囲気の変化を見止めた雑音は、

「ふん、ようやくもって僕のことか理解できたかな？」

はでは、そろそろ始めようか。………言っておくけど

短刀を握り締め、口元に笑みを残しつつもユネアに鋭い視線を向けながら、

「藁わらにすがっても、もう遅いよ」

## 第七話「屋上にて」 その一

亜紀雄は、勢いよく鉄の扉を開けた。  
開ける視界。

星空。遠方の街明かり。手すりに囲まれた長方形。そして、そこにいる三人。 ブロonzの髪を夜風に流している東リーネ、その側に寄り添うように立っている紅色の和服をまとった少女、あとは 彼女らから少し離れたところで、地面に突っ伏しているスズラン。

「す、スズランッ！」

亜紀雄はスズランの方へ思わず駆け出しす。が、

リンッ

和服の少女が、鈴の音と共に扇子を振った瞬間、キンッという鼓膜に突き刺さる音と共に、亜紀雄の右半身に ドシンッ、という、重い衝撃。

「ぐあっ……………」

砲丸の直撃を食らったように、横に吹き飛ばされる亜紀雄の体。そのまま地面を数メートルスライドした。

「……………てて」

「まったく、もう少して終わるのデスが……………」

その様を無感動な瞳で眺めながら、リーネは無感情な声音で呟く。「ここまでくると、そのしぶとさと言うかしつこさと言うか、そろそろ感心してもいいかとも思います。アキオ、アナタは意外と諦めが悪いんデスね？」

「だから、諦めるわけがないって言うてるだろ！」

亜紀雄は体を起こしながら叫んだ。しかし、左肩に走る痛み。今の衝撃でひねったのかもしれない。

「くそっ……………さっきの白いやつといいそいつといい、変な力使いやがって……………」

「ウフフ。そうデス。これが精霊の能力デス。人間にはない力デス。実際に食らってみて、その強さ、そして恐ろしさを理解できマシタか？ ……もつとも彼らの能力も、スズランさんのそれに比べたら至極安全なものデス。なんせ彼女は『死』の精霊。その手で触れるだけで、すべての生きとし生けるものを殺せるのデスから。触れさせるだけで『THE END』。そんな危険な能力、他に聞いたことがありません」

「だから、それを使わなければいいだけの話だろ！」

亜紀雄はすくつと立ち上がり、そしてスズランの方へ視線を移して、

「おい、スズラン！ 平気かつ！」

スズランに呼びかけた。

スズランは顔を上げ、焦燥の表情を浮かべて必死に口を動かすが、

「……………」

亜紀雄の耳には何も聞こえてこない。スズランの声を邪魔するよ  
うな音はここには何もないはずなのに、声が伝わってこない。テレ  
ビを消音にしているように、唇だけがパクパク言っている。

「ど、どうした！ 何か言ってくれ！」

「無理デスよ」

亜紀雄とスズランのやり取りを制するように、リーネが薄ら笑い  
で口を挟んできた。

「スズランさんは現在、そこにいる和服の精霊 エン のテリ  
トリーの中にいます。境界は見えていませんが、彼女の半径一メー  
トルには入れませんし、声も届きません。残念ながらスズランさん  
は逃げられませんが、アナタと彼女のコミュニケーションは不可能デス」

「…………それがそいつの能力か」

「そうデス。ウフフ。どんな能力か分かりますか？」

まるで分かるはずないだろうとでも言いたげな、リーネの嘲笑。  
しかし亜紀雄はその笑みを無視して、再度スズランの方へ顔を向  
けた。

いつだかのように、両腕、そして片足が砕かれている。紙粘土を固めて砕いたような、崩壊部分。先刻家で見たとき以上に制服は破け、切られ、汚れ、廃れ、もうスズランには後がないことが、あと数分で存在が消えてしまふ対象であることが、見て取れる。見て取れてしまう。

相変わらず声は聞こえてこないが、スズランは必死な形相で、なおも叫び続けている。口を動かし続けている。その唇の動きを見るに、何で来たのですか、早く逃げてください。そう言っているように見える。早く逃げるよう、訴えかけているように見える。

そんなこと、できるわけないだろ！

最後に見るスズランが、こんな傷ついた姿だなんて……。

リーネは、唇をぎゅっと噛んだ亜紀雄の顔を一瞥し、  
「そうですね。エンの能力について、何ならヒントでも差し上げ

」  
「風か、音が、重力だろ？」

亜紀雄は、リーネを睨みつけながら断言。

その返答にリーネはぴくりと眉を動かし、次いで感心したような顔になって、

「……へエ。何を根拠に？」

「見れば分かるだろ。スズランはそこまで顔に外傷は被っていない。ホコリで汚れてる程度で、口や首の周辺に攻撃を受けた様子はない

スズランの発声が止められているんじゃない、明らかに『音』が遮られている。じゃあ、『音』を遮るにはどうすればいいか？

精霊が扱える自然現象に則って、空気の振動たる『音』を遮るにはどんな方法があるか？ ……そんなの、落ちこぼれの僕にだって分かる。風で空気の振動を止めるか、音自体を操って消し去るか、重力で空気の密度を大きくし振動を殺すか。この三つなら、さつき僕に向けてきた攻撃が何も見えなかったことにも説明がつくしね。まあ、気圧がそこまで大きくなると、スズランは身動きがまったく取れなくなってるだろうから、十中八九、風か音だろ？」

「……ウフツ、ウフフ、アハ、アハハハ、アハハハハハハハ」

リーネは堪えきれないように笑い声を上げ、

「さすがデス！　さすがデス、アキオ！　さすが私が見込んだだけ  
のことはありマスね！　さすがデス！　鋭いデス！　ウフフ。実は  
今あなたが挙げた三つの能力は、私が対スズランさん用に考えてい  
たものとぴったりのデス！」

「対……スズラン用？」

「ええ、そうデス。さつき言った通り、スズランさんは触れただけで  
精霊すら殺せますからネ。必然的に遠距離攻撃が必要にナル。加  
えて、こちらは追う側。スズランさんを見失ったら負けデス。デス  
から、チャンスがあれば確実に当てられる攻撃が必要。相手にかわ  
しづらい攻撃。つまり広範囲で、しかも見えない攻撃デス。そうな  
ると、自然と今の三種類の能力が最適ということになるのデス」

「……やっぱり、音か風……」

「そうデス。そこまではご名答と言っておきまショウ。しかし  
ここでリーネは口の端を吊り上げ、

「能力の中身が分かったところで、一体アナタに何ができるのデス  
？　スズランさんでさえ敗れたこのエンの能力に、人間であるアナ  
タが一体どうやって太刀打ちできると言うのデス？　ウフフ。あり  
えませんよ。そんな術なんか。たとえ

さつき小林さんから渡された『お札』を使ったとしても！」

「……………！」

亜紀雄は目を見開き、札を持っている左手を握り締めた。

「……な、何でそれを……」

「ウフフ。アキオはまだ知らなかったのデシタね。別に難しいこと  
ではありません。聞けばそんなことかと納得することデス。つまり  
デスね、精霊とその主は、離れていても意思疎通ができるのデス」  
「いし……そつう……？」

「はい、そうデス。だから、階下の状況は私にも分かっていたのデス。ユネアから聞いていたのデス。私とユネアは情報交換をしていたのデス。………もっとも、今はもう分かりませんが。もう下の決着は着いているのデスよ。ユネアは敗れて、精霊界に返されてしまいマシタ。別にユネアも戦闘には疎くないはずなんデスが、あっさり負けてしまいマシタ。たった三手。十秒足らずデシタよ。小林さんは恐ろしい人デスね。………しかし、とっくに決着がついてるのに屋上に現れないところを見ると、彼はもう帰ってしまったようデスね。良く分からない人デス………まあ、こちらとしてはありがたいことデスが」

リーネは自嘲的な笑みを浮かべた。

「さて、これで分かりマシタか、アキオ？ さっき私が『あなたは本当のスズランさんの主ではない』と言った事？ その根拠？ そうデス。真に精霊と主の関係にあるならば、スズランさんとアナタは常にコミュニケーションできるはずなのデス。学校や町中を探し回ったりしなくとも、意識を飛ばしさえすれば、スズランさんに直接居場所を聞くことができたはずなのデス。スズランさんだって、わざわざ私達から逃れなくても、アナタに思いを伝えることはできたはずなのデス。しかし、アナタ方はそれをしなかった。できなかつた。あなた方は意思疎通がデキナイ。そう。真の精霊と主ではないのデス。そんなアナタに、私達の仕事を邪魔する権利などないのデス」

リーネは亜紀雄の真正面に佇み、凍えるような声音で言い放った。  
「さあ、分かりマシタか？ アキオ。理解できマシタか？ できたのなら」

「分かるわけないって言ってるだろ！」  
亜紀雄は声を張り上げる。

「何度も何度も言わせるな！ そんな理由で、僕が納得するはずないだろ！ 僕に何ができるとか、何ができないとか、そんなのは関係ないんだ！ 僕に何かあるとか、何がないとか、そんなのは理由



リーネは、頬を引きつらせた苦笑い。

「ここまで真正面から否定されるとは。何でしょう、これも失恋の一種なのデシヨウか？ だとしたら、ものすごく悲しいデスが……。しかしどうあれ、状況は変わりませんよ。私たちの優位性はそのままデス。それとも………何か、状況を打開する策でもあるのデスか？」

リーネは、亜紀雄に対して挑発的な微笑を向けてくる。

亜紀雄はその顔をじっと睨み、体勢を低くし、後ろ足を勢いよく蹴って、

「さあね！」

前へ駆け出した。

超常的な能力を使う精霊と、精霊を使うことに長けた精霊使い。その力の全貌は亜紀雄には推し量るべくもない。一般人足る亜紀雄に理解できるわけもない。対抗策を考え付けるわけもない。

しかし、一つだけ覚えていた。

リーネのセリフ。

『精霊が人間を殺すことを止めるのが、東家の使命』

つまりリーネは、このエンという精霊に亜紀雄を殺させない。死に到るほどの攻撃は加えない。少しは手加減が加わっているはず。

亜紀雄がつけ入るのは、まさにそこだった。そこだけだった。

それだけを期待して、地面を蹴り続ける亜紀雄。走り続ける亜紀雄。エンに対してあと数メートルの距離へと迫ったところで、

リンツ

エンは扇子を振った。そしてキンツという超高音が耳に響いたその瞬間、

亜紀雄はエンに側面を向けて屈みこみ、腕で頭を庇って、完全な防御の姿勢をとった。ダンゴ虫のような体勢。地面にしがみつき、

攻撃が当たる表面積を最小限にして、耐えきる戦法である。

予想通り、脇に加わった衝撃に亜紀雄は弾き飛ばされたが、二メートルほど空中を飛んだところで両手両足で踏ん張り、それ以上の後退を避ける。

そして迷わず、再度エンに方へと駆け出す亜紀雄。

エンが再び扇子を振り上げる前に、エンに向かって左手を伸ばし、札を構えたところで　　ふと、亜紀雄は迷った。

どこに、この札を向ければいいんだ？

どこに、この札を当てればいいんだ？

雑音の説明によると、この札は精霊の急所に当てると効果を発揮する。急所に触れさせることにより、精霊を人間界から返すことができる。つまり、この札をエンの急所に当てなければならぬ。

エンの急所ってどこだ？

どこに当てればいいんだ？

亜紀雄がその迷いに意識を奪われたその刹那の間、

リンッ

エンは扇子を振り上げ、振り下ろし、直後、

「うおっ！」

亜紀雄は吹き飛ばされた。

防御ができず、完全に体を持っていかれる。足が地面から離れた。紙風船をはいたように、亜紀雄の体が宙に浮く。

そしてそのまま後方へと飛ばされていき

ガシャンッ

「ぐあっ！」

手すりにぶつかって、ようやく亜紀雄は着地した。

「……………てててて」

「まったく、命知らずなことをしますね」

腰をさすりながら立ち上がった亜紀雄に、リーネは嘲るように言葉をかける。

「ここが屋上だということ、忘れないでくださいね？　もしエン

が力加減を間違つたら、アナタはまっ逆さまなんデスよ?」

「……大丈夫です、主。ちゃんとギリギリを狙います」

「そうデスか。それは頼もしい。よろしくお願いシマス」

透明な声で答えたエンに、リーネは微笑を向ける。

「くそつ……」

擦りむいた頬をぬぐいながら、亜紀雄はリーネとエンを睨みつける。

エンの能力、恐らく『音』で間違いないだろう。三回攻撃を受けて、三回とも キンツ という高音が聞こえてきた。つまり、この攻撃は高音を発している。十中八九、超音波によるもの。だからこそ高速で、避けることも叶わない。

しかも今の一連の攻防で、エンには力加減を覚えられてしまっただろう。

前には進めない、しかし致命傷は食らわず、手すりを飛び越えて屋上から落ちることもない。これからはそういう攻撃になるはず。そういう攻撃しか来ないはず。もう、強行突破はできない。

「さ、アキオ。分かりましたでシヨ? これ以上は無駄デス。これ以上バカな真似はしないでクダサイ」

確かに、

確かに、これ以外に手が浮かばない。

エンに札を当てる手段が他に考え付かない。

エンに再び近づく方法があるとも思えない。

エンの攻撃をかいくぐる術があるわけもない。

どうしようもない。

どうしようもない、どうしようもない。

どうしようもない、どうしようもない、どうしようもない。

八方塞、

袋のねずみ、

万事休す、

なす術なし、

もう本当に、どうしようもな

『 何でそんなところでつつ立ってるんですか？ 』

急に、数時間前の花塚まいみのセリフが脳裏に甦ってきた。

『 そんなんだから、いつでもどこでもなーんにもできないんですよ  
このタイミングで、リフレインする。』

『 そんな生き方が不毛じゃなくて、一体何だって言うんです？ そ  
んな生き方が不憫じゃなくて、一体何だって言うんです？ 』

痛かった言葉が、鼓膜に響く。

『 僕には何もできないなんて、ただの言い訳です 』

覚えていたくもない言葉なのに、鮮明に覚えている。

『 そうやって生きていて、一体何ができるって言うんです？ 一体  
何が守れるって言うんです？ 一体誰のことを守れるって言うんで  
す？ 』

嫌になるくらい、鮮明に残っている。

『 何か をしなければならぬんじゃないんですか？ 』

そう、そうだ。

何ができるか、じゃない。

何もできない、じゃない。

そんなのは言い訳、

そんなのはへ理屈、

そんなのは戯言。

そう、そうだ。

『 何か 』をしなければ。

今、『 何か 』しなければ。

大丈夫、もう分かってる。

僕は二度と、立ち止まりやあしない。

亜紀雄は再び瞳に光を取り戻し

あそこまで見透かされた

ように言われると、花塚さんは人の心が読めるんじゃないかと思え

てくるナ エンに向かって構えた。鋭い眼光を向け、半身になつて体の重心を落とす。

その様子を見て、

「……アキオ。まだ分からないんですか？ これ以上は、本当に無意味です。これ以上のやり取りは無価値です。疲れませんか？ ……」

ハア。まあいいです。次で終わりにしましヨウ。 エン、気を失う程度の攻撃にコントロールできますか？」

「……問題ありません」

エンの、透き通るような声での返答。扇子を肩まで振り上げ、構えた。見まごうこともない、完全絶無の攻撃態勢。

静かな威圧感と緊張感をまとつたその構えを見せられ、

次はどうすればいい？

と、うるたえかけた、迷いかけた、惑いかけた、その瞬間

『何か』をしなければならぬんじゃないですか？

考えるよりも早く、意識するよりも早く、亜紀雄は前へ駆け出した。振り下ろされるエンの扇子。

リンッ

鈴の音と共にキンッという音がアキオの耳に届いた

次瞬、

亜紀雄はいつの間にか、ブレザーを脱いでいた。

そしてそのままその上着を空中に放り投げる。ばさばさと広がる布地。亜紀雄の視界は完全に紺色になつた。 その時、

亜紀雄は身を屈め、ブレザーの影に全身を隠した。

ブレザーの布地を貫通して、衝撃が亜紀雄の半身に届く。しかし、その威力は格段に弱い。弱くなっている。ゼロではないが、百パーセントでもない。吹き飛ばされるほどではない。

そう、これは吸音。

例えば布団にくるまっっていると声がほとんど外に届かないように、柔らかい布地には音を吸収する効果がある。音を殺す効果がある。敵の能力が『音』だとわかっているなら、こういう手段もある。

これは突拍子もない、瞬間的な思い付きだった。

果たしてブレザーの薄い布地で一体どれだけの効果が得られるかは疑問だったが、ある種の賭けだったが、結果　うまくいった。そこまで大幅に衝撃は殺せなかったが、それでも十分だった。亜紀雄は駆けていた勢いを殺されつつも後方に少し跳ばされつつも、しかし体勢を崩すことなく、再度地面を蹴る。

そしてエンに届くまで二メートル、一メートルと近づいたところで、亜紀雄は札を握った右手を前へ突き出した、が

これをどこに当てればいい？

精霊の急所はどこだ？

エンの急所はどこだ？

目の前では、エンが扇子を振り上げ、二度目の攻撃に移っている。どこだ？

エンの振り下ろす扇子の動きが、

どこだ？

スローモーションで、コマ送りで、

どこだ？

少しずつ下へと、

一体この札をどこに当てれば？

下がっていく。

どこに当てればいいんだ！

『……………は……………』

どっ？

『え……………は……………た』

どっ？

『…んの……しよは……か…』

どこに、どこに？

『えんの……は……肩』

どこに？ どこに？ どこに？

『……の急所は…肩』

ど……こ……

『エンの急所は右肩です！ 亜紀雄様！』

精神の奥底から浮かび上がるような 響き渡るような 奮い  
起こすような 拭い去るような 駆け抜けるような 煌くよ  
うな 瞬くような 輝くような はためくような 謳うよ  
うな 踊るような 果てるような 澄み渡るような声にハッ  
とし、亜紀雄はエンの動作よりも早く、右手を真っ直ぐ前に突き出  
す。

エンの右肩に触れる札

その瞬間、

「きゃっ？」

驚きの声と共に、エンの体が青白い光を放ち始めた。

「ちよ、そんな、エン！」

そんなリーネの叫び声に構う暇もなく、亜紀雄は眼前の光を遮ろ  
うと顔を背けて、腕で頭を覆う。

四方に飛び散る光。

巻き込まれる周囲。

視界が真っ白になる。

そしてシュンという音がした後 辺りは再び静寂に包まれ  
た。

## 第七話「屋上にて」 その二

「はあ、はあ、はあ、はあ……………」

人影がもはや三つしか見えない校舎の屋上。

亜紀雄は腰が砕けたように、地面にへたりこんでいる。

目の前には、紅色の着物をまとった日本人形。眠るように、くたりとコンクリートの上に倒れている。それはもはや人形であり、人形でしかなく、人形ではないため、それ以上動くわけもなかった。

「…………… はあ、はあ、はあ、はあ」

「亜紀雄様！」

聞き慣れた声で名前を呼ばれて、亜紀雄は驚いた 何より

も誰よりも聞き慣れた声で呼ばれたこそ、亜紀雄は驚いたのだった。

首を回して振り返ると、砕けた腕で上体を起こしているスズラン。肩の力だけで体を滑らし、少しずつ亜紀雄の方に近づきながら、

「亜紀雄様！ ご無事ですかっ？」

そうか。エンが消えたから、テリトリーも消えて声を通るようになったんだ。聞こえるようになったんだ。届くようになったんだ。

亜紀雄は納得して、

「ああ…………… 大丈夫」

少しずつ息を整えながら、静かに答える。

ふと、コツコツとこちらに近づいてくる足音に気付いて、亜紀雄は目線を上げた。目の前には、腕を組んで立ち尽くす東リーネ。口をへの字にした表情で、亜紀雄を見下ろしている。

「…………… な、何だ？ 今度はお前が相手になるっていうのか？」

「いえ。その気はありません」

首を水平に振りながら小さな声でそう言うと、リーネは身をかがめ、亜紀雄の前に転がっている日本人形をすくうように手に取った。そして再度直立し、

「残念ながら私には精霊のような能力はありませんし、このままでは私が直接スズランさんに攻撃しなくてはなりません。……教室でならともかく、敵としてスズランさんの攻撃半径に入るのは避けたいデスしね。私はそんな身の程知らずではありませんよ」

「じゃあ」

「……そうデスね、今回はこれで身を引きます」

言いながら、リーネはフウツと深いため息をついた。

「保険の意味も込めて、精霊を二人も降ろしていたのに……。負けるなんて、ホント想定外デシタ。特に、小林さんにユネアを倒されたのが誤算デシタね。そのせいで、エンはスズランさんを抑えながらアキオを相手にしなくてはならないという、何とも不利な状況に陥ってしまいマシタから……。ユネアはアキオに対して十分な能力を割けませんデシタし、しかもアキオは札を持っていたわけデスし、ね。まあ、それでも勝算はあつたはずなんデスが……。アキオ、よくエンのエネルギーポイントが分かりマシタね？」

「え？ そ、それは」

「ウフフ。……別に言われなくても分かりマスよ。数時間相対したスズランさんなら、エナジーポイントくらい読んでいたでシヨウし……。偶然にしては偶然過ぎる。マグレにしてはマグレ過ぎる。奇跡にしては奇跡過ぎる。恐らく。そういうこと。なのでシヨウ？ ウフフン。とりあえずは、『おめでとうございます』と云っておきまシヨウか？」

肩を落とし、リーネは気の抜けたような、力のない笑顔を浮かべる。

亜紀雄はスクツと立ち上がりながら、

「……しかしお前は。お前らは、スズランのことを諦めるわけじゃないんだろ？ 納得したわけじゃないんだろ？ そのうちまた襲ってくるつもりなんだろ？ 精霊を降ろしては、何度も僕達に

」

「いえ……。正直言うと、思い通り、狙い通り、理想通りの精霊を

降ろすには、私でも少し時間がかかるのデスよ。ユネアもエンも、結構苦勞して降ろしたんデスから。運がよくても一週間　あ  
るいは数ヶ月の間、どうにならない可能性もありマス。デスからまあ、スズランさんに対抗できる戦力を得るまで、再戦を挑むまでには少し期間が開くことになる　ということに　しておいてくだサイ　」

「……………　しておいてください？　」

違和感のある表現に、亜紀雄は首をかしげて聞き返した。

しかしリーネは、意識を亜紀雄からずらすかのように視線を外し、屋上の入口の方に顔を向けて、

「　とりあえず私にも、色々考えなければならぬことがあるのデスよ　」

まるでドアの向こう、階下の踊り場を睨みつけるように、瞳に鋭利な輝きを浮かべた。

「……………　リーネ？　」

「ま、とにかく！　」

リーネは急にやたら明るい声音に変え、気分を切り替えるように、「今回は私の負けデス！　それは認めマス！　これで私は帰りマス！　そういうわけで、明日からはまたクラスメイトとして、よろしくお願いしマス　」

そう言って、後ろに手を振りながら、リーネはドアから出て行った。

バタンッ

今夜、二人目の退場者。

あるいは、脱落者。

こうして屋上の人影は、残り二つになる。

星空の下。急に静かな空気が流れる屋上　　ふいに、

「亜紀雄様！　」

スズランが声を上げた。

亜紀雄が振り返ると、スズランは依然砕かれた腕で上体を持ち上

げたまま、悔いるような後悔するような表情を亜紀雄に向けて、  
「……今回は、本当に申し訳ありませんでした。私のせいでこのよ  
うなことになってしまい。私の問題に亜紀雄様まで巻き込んで。亜  
紀雄様にまで迷惑をかけて。あまつさえ、亜紀雄様におケガまでさ  
せてしまつて……。心底から悔いております。反省しております。  
もう二度と、このようなことは起こしませぬ。誓つて、同じ間  
違いは犯しませぬ。断じて、二の舞は踏みませぬ。本当に申し訳あ  
りませんでした。申し訳ありませんでした。申し訳ありませんでし  
た。この償いは、私がこの身をかけて」  
「スズラン」

スズランの謝罪を遮るように、亜紀雄はスズランの名前を呼んだ。  
そしてくるりとスズランから顔を背け、街の夜景を眺めるような立  
位で、

「前から言おうと思つてただけだよ」

「……はい？」

「君の言葉には、一つ、矛盾があると思うんだ」

亜紀雄はスズランに背を向けたまま、遠くに語りかけるように言  
う。

スズランは首をひねり、風にそよぐ亜紀雄の後ろ髪に問いかける  
ように、

「わ、私の言葉に、矛盾……ですか？ ええと、それは」

「……あの委員会の時、君はこう言つたよね？ 『僕の最期を看  
取るまで、僕の側にいる』つて。……文章は少し違うかもしれない  
けど、そんなことを言つた。そんなニュアンスのことを言つた。  
確かに言つた。宣言するように言つた。ちゃんと覚えてるよ。」

……そして、今日。僕の部屋で、君は何て言つた？ 君は

君は、『この身が滅ぼつとも』つて、言つたんだ」

「……あつ……」

亜紀雄の言葉を認識し、亜紀雄が言おうとしていることを理解し  
て、虚を着かれたような顔になるスズラン。

「……これは、どう考えても矛盾してるだろ？ 前者は、僕が先にいなくなる。けど後者は、君が先にいなくなる。……これは、どうしたって同時には起こりえないことだ。起こりえないこと、ありえないこと。もし……もし君が本気で、僕が死ぬまで僕の側にしようとするなら、君は滅んだりしちゃいけないだろ？ 消えちゃいけないだろ？ いなくなっちゃいけないだろ？ そんな風に自分を犠牲にしたりしたら、実現しない。約束が守れるわけがない」

風のような声で、諭すように亜紀雄は言葉を続ける。

「だからさ、君が自分の言葉に責任を持つなら　あの宣言を守るって言うなら、君は君の事を勝手に諦めちゃだめだよ。勝手に傷ついちゃダメだよ。勝手に苦しんじゃダメだよ。僕の側から勝手にいなくなっちゃだめだよ。勝手に消えちゃダメだよ。勝手に離れちゃダメだよ。……それにさ、君が一人で勝手に傷つくのも、苦しむのも、僕は嫌なんだ。僕はそんなの見ていたくない。僕の側にいるって言うならなおさらだ。僕はそんなのは嫌だ。そんなのは僕の望むものじゃない。そんなのは僕の理想じゃない。

多分……多分だけど、僕の曾曾曾じいさんもそう思ったから、そう思ったからこそ、君を側に置いておいたんじゃないか？ 君を戦いの前線には置かなかつたんじゃないか？ 君と一緒にいたんじゃないか？」

「……隆久様、も？」

「そう。だからさ　君が約束を守るって言うなら　あの宣誓を遵守するって言うなら　僕が死ぬまで僕の側にいるって言うなら

僕の最期を看取るまで僕から離れないって言うなら

「 亜紀雄は、視線を落としながら振り返り、

「 傷つかないで、苦しまないで……消えないで」

スズランに言い聞かせるように、語りかけるように、説き伏せるように、懇願するように、哀願するように、祈願するように、悲願



## エピソード

リリリリリリ

スズメが何の気兼ねもなくチュンチュンと鳴けるくらいに晴れ渡った朝。亜紀雄の夢は電子音によって途切れた。

リリリリリリ

「……ん……む……」

耳障りな音に顔を歪めながら、布団の中でモゾモゾともがく亜紀雄。しばらく右に左に寝返りを打った拳匂、亜紀雄は亀のように布団から腕を伸ばして、

リリリリ、リ……………

アラームを止めた。

そして再び腕を布団の中にしましこみ、「すうすう」と寝息をたて始める。

別段、亜紀雄は朝に弱いわけではない。毎朝目覚ましが鳴る前に目覚めるといふほどではないが、しかし起こされればその時点で意識は大抵はつきりする。二度寝など、今まで数えるほどしかしたことがなかった。

だが、今日は違う。

朝だというのに、周囲は十分明るいというのに、それでも亜紀雄のまどろみは晴れない。睡魔は消えない。やたら眠い。それもそのはずである。

昨夜亜紀雄が眠りについたのは、明け方の四時。

家に帰ってきた時点ですでに深夜二時を回っており、その後腹ごしらえなり何なりを終えた頃には、さらに二時間が経っていたのだ。いつも十二時には床につく亜紀雄には、大晦日以来の夜更かしであった。

加えて、目覚ましが指し示す現在時刻は、六時。

いつもの起床時間の一時間前である。

それというのも、今朝は体育委員の仕事が急きよ増えたからである。昨夜はあんなことがあったというのに、他の事など考えられないような目に遭ったというのに、寝る直前になって思い出したのだった。花塚まいみがわざわざ家を訪ねてきて、伝えてきたことを無視してしまおうとも思ったが、これ以上村雲教諭の機嫌を損ねるとどうなるか分かったものではなかったので、仕方なく目覚ましの時間を早めたのであった。

だが、いざ朝になると起きる気にはなれない。

これほど強烈な睡魔に抗う術を、亜紀雄は知らなかった。

結局、目覚ましが鳴る前のような、目覚ましなんて最初からセツトしていなかったのではないかとでも言うような、幸せそうな熟睡風景が続いている。スズメの鳴き声と寝息の二重奏だけが響いている。と、そこへ

「主っ。朝ですよーっ」

扉が開き、スズランの明朗な声。彼女も亜紀雄と同じ　あるいは、それよりも数十分睡眠時間を削っているくらいの　タイムスケジュールで朝を迎えたはずだが、しかしその顔には眠気も疲労も浮かんでいない。いつもの朝、もしくはいつも以上に晴れやかな朝の様相であった。

朝日に負けないくらいいまぶしい笑顔を浮かべたスズランは、亜紀雄のベッドの方へ近づいていつて、

「さっ、主。起きてください」

背中を揺らしながら声をかける。

しかし亜紀雄は、布団の中で鬱陶しそうな顔をして、

「……………うん……………」

「ごろんと体を回転させて、スズランに背中を向けた。

「主、遅れますよ?」

「……………むん……………」

「朝食はもうできてるんですから、さあっ

「……む……むん……」

うめき声しか返ってこない。

スズランは腰に手を当てて「もうっ」と息を吐き、再度亜紀雄の背中を揺すって、

「ほら、また先生に怒られてしまいますよ?」

「……む……む……」

「起きてくださいっ」

「……むーん……」

一言ごとに、耳に近づいてくるスズランの声。夢うつつの中、亜紀雄の脳裏に嫌な予感が駆け巡った瞬間

頬に、生暖かい感触。

「うひっ」

亜紀雄は飛び起きた。

「な、ぬ、あ、スズラン、今、何し」

「うふふ。ドラを取り上げられてしまいましたからね。次はどんな方法にしようかと考えていたのですが、やはり『押してだめなら引いてみる』だろうと」

言いながら、胸を張るスズラン。

「……だ、だからって」

「効果てき面のようですし、しばらくはこの手でいきましょうか、うふふ さ、パンももう焼けてますから、早く降りてくださいいね」

やたら嬉しそうな顔で言いながら、スズランはドアへと進んで行く。

スズランが廊下へと足を踏み出そうとした間際、その背中を眠気眼でぼんやりと眺めていた亜紀雄は、思い出したように、

「……そうだ、スズラン。体はもう大丈夫なのか? 昨夜は応急処置しかしなかったけど」

「はい、何も問題ありません。すごぶる快調です。まあ、憑いてし

まえば人形の亀裂などほとんど関係ありませんし。それに、昨夜主が手ずから処置してくださった肢体ですから」

「……やめる、そういう誤解を招くような表現は」  
「うふふふ」

まるで本日が人生最良の日であることを確信したかのように、どこまでも楽しそうに笑いながら、スズランは部屋から出て行った。

亜紀雄はのっそりとベッドから這い出し、クローゼットを開きながら、

「……まあ、日常は日常だから幸せってことかな」  
呟くような、独り言。

校庭のライン引きを遂行し、

朝だというのに結構な疲労感を感じつつ、ぱらぱらと登校してきた生徒達に混じって、亜紀雄も自教室にたどり着いた。

まだ数人しかいない一年三組のクラスルーム。

カバンの中身を机の中に移し換え、ようやくこやくこやく一息つけると、亜紀雄は椅子にどかりと腰を降ろした。

ふと教室の後方に目を向けると、机に片肘をついている小林雑音。大きな口を開けて、あくびをしている。

亜紀雄は、周りの人間がこちらを意識していないのを確認すると、本日の授業の確認をしているスズランにも感づかれないように、雑音の方へそつと近づいて行って、

「……小林君」

「ん？ ああ、お早う、鞆河君」

「お早う。……あの、昨夜は本当にありがとう。もし君が居なかったら、どうなってたか」

「はは、別にいいよ。言ったでしょ？ あれは恩返しだった」

「あ、ああ。そうだったネ。……でも、前から疑問だったんだけど、恩返しって一体僕は君に何を」

「小林君！」

突然の会話への乱入者。女子生徒の声である。

亜紀雄と雑音が同時にそちらへ顔を向けると、そこには肩を怒らせた東香々美が立っていた。カバンも置かず、頬を膨らませてこちらを睨んでいる。

雑音は狼狽しつつ、頭上にハテナという文字を浮かべながら、

「……東さん？ どうしたの、朝っぱらからそんな怒って？」

「どうしたもこうしたもないわよ！」

香々美は依然言葉に怒気を含ませて、

「ちよつと、何なのよ！ あのホワイトデーのお返しは！ 開けてびっくりしたわよ！」

「ホワイトデーの？ って、昨日渡したやつ？ あれ、そんなまずかったか？ ……でも、君がくれたのだって結局義理チョコだったんだから、そこまでハイレベルなのを期待されても」

「何でモンブランケーキなの！」

気圧を変動させるかのような、香々美の怒鳴り声。

雑音は豆鉄砲を食らったような顔で、

「……………は？」

「よりもよって、栗嫌い歴十六年の私に、モンブランケーキを送りつけるとは！ どんな嫌がらせよ！ 折角チョコ上げたのに！

恩をあだで返されて砂まで引っ掛けられた気分だわよ！」

「だわよ、って　　というか、君は栗嫌いだったのか？ いや、そんなの知らなかったんだ。悪かったよ。それは完全に不可抗力なんだ」

「まったく、リサーチが足りてないわ！」

目を逆八の字にして、ぷいっとそっぽを向く香々美。ふと、片目を開けて雑音の方を見やり、

「……………小林君、反省してる？」

「へ？」

「反省してるかって聞いているの」

「いや、まあ、嫌いなもん渡しちゃって、悪かったなー、とは思ってるよ」

「だったらその贖罪に、ここに連れてって！」

言うのが早いか、香々美はぱつと雑音の目の前にぺら紙を差し出してきた。

雑音はそこに書いてある文字を見つめ、

「……何、これ？」

「読めば分かるでしょ！ ケーキバイキングよ、ケーキバイキング！ 三十種類のケーキが食べ放題なのよ！ 小林君、私をここに連れてって。もちろんおごりで！」

「な、何だそりゃー！」

叫ぶ雑音。

「ちょ、そりゃあ話が飛躍しすぎだろ！ 聞いてないって！ 何だよ、これ。参加費五千円じゃないか！ しかもこれ、店の場所が結構遠いし！ 片道だけで電車賃千円以上かかるぞ！」

「これぐらいしてもらわないと」

「割に合うかー！ 義理チョコのお返しに、何で貯金を切り崩さなけりゃならないんだ！ ふざけるな！ こんな、僕は断じてゴミンだぞ」

「……ふーん。私を連れて行く気はない、と」

「当たり前だ！」

「……なるほどー、そっかー、そうですかー……」

冷めた声で、思わせぶりなイントネーションで言う香々美。背中を手を組み、視線を下に向けて、

「……じゃあ、私、今後一切、あんたに数学の宿題見せないわよ？」

「な……！」

「しかも、それだけじゃないわ。古文も世界史も、化学も見せてあげない。もちろん、夏休みも冬休みもね？」



ないのである。

亜紀雄がそこにたどり着くと、すでに先客がいた。

これが自分のアイデンティでも言うように、いつも通りのポニテールを上げた女子生徒。手持ち無沙汰なように足で地面に絵を描いている、花塚まいみである。

まいみは、ようやく現れた亜紀雄に気付き、

「もうっ、遅いですよ!」

「ああ、ごめん」

頭をかきながら、謝る亜紀雄。

休み時間に廊下ですれ違った際、昼休みにここへ来るよう呼び出しておいたのであった。雑音の時は周囲にほとんど人がいなかったが、しかしあれは偶然そうなっただけでまいみとまた同じ状況になる可能性は極めて低いからである。

しかも、雑音はわざわざあんなところに現れたことから考えていくらかわけを知っていたのかもしれないが、このまいみがスズランに関する何やらかんやらを知っている可能性は低い。人がいる手前で、大声で理由やら原因やらを尋ねられたら敵わんということ、このような人気のない場所に呼び出したのだった。

「あ、で、その、話つて言うのは いや、何て言ったらいいのか、いまいちよくわからないんだけどさ」

「まったく、告白なら早くしてください! 回りくどいですよ!」

「……へ?」

亜紀雄は目を点にした。

「……告白?」

「もう、こんなありきたりな場所に呼び出されたら、それくらい分かりますよ! まったく。言いたいことがあるならさっさと言うってください!」

「……いや、あの……その……告白じゃ、ないんだけど……」

「……へ?」

今度はまいみが目を点にした。

「いや、告白とかじゃなくて、昨日のお礼をと思ってネ。その、君の言葉は胸に響いたというか、刺さったというか。………実際、君がハツパをかけてくれなかったら、僕はあのまま諦めてただろうしね。助けられたんだ。だから、凄く感謝してる。本当　　ありがとうございました」

言いながら、亜紀雄はぺこりと頭を下げる。

「そ、そそ、そうですか！」

まいみは慌てた顔になり、顔を明後日の方に向けて、

「べ、別に私はハツパをかけたとかそういうんじゃない、ただあなたの心をなぞっただけですから、そんな感謝されるいわれはないんですが………ま、まあ、一応受け取っておきましょう　　よ、用はそれだけですか？　だ、だったら、私は次の授業の準備をしなきゃならないので、ささ、先に帰ります」

そう言っつて、そそくさと立ち去ろうとするまいみ。

まいみが裏道から出ようとしたところで、

「……………花塚さん」

亜紀雄は呼びかけた。

まいみはひよこんと振り返り、

「は、はい？　何です？」

「……………もし　　もし、今、僕が本当に君に告白したとしたら、

返事はどっちなんですか？」

亜紀雄は、考えもなしに、何となく、どうということもなく、聞いてみた。

しばらく亜紀雄の目をじとりと見ていたまいみは、顔を前に戻し、

「……………そんなの、今答えてもしょうがないじゃないですか」

「……………そりゃそうダ」

「じゃ、また」

そう言っつて、まいみは校舎へと帰っていった。

一人残された亜紀雄は、呟くように、

「……………花塚さん、別に、人の心が読めるってわけじゃないのか

な？」

現代文、物理の授業を乗り越え、あっという間に、あるいはようやく訪れた下校時刻。

部活に所属している生徒はすでに部室やグラウンドや体育館に向かつており、帰宅部の人間ばかりが帰り間際の談笑を催している中、カバンを膝元に提げたスズランが、いつもの質問を亜紀雄にしようとして

「さ、帰りましようか、主。今夜の夕飯は一体何を」  
「アキオーツ。一緒に帰りませんか？」

スズランのセリフは、リーネの声に遮られた。

「駅前に新しい喫茶店ができたらしくて、そのパフェが絶品らしいのデス。ちよつと寄っていきませ」

「リーネさん？」

ひよっこりと亜紀雄とスズランの間に顔を出したリーネに、スズランはおどろおどろしい声音で、

「……あなた、昨日の今日で、よくもまあそんな風に主に話しかけることができますね？」

「昨夜言っただじゃないデスカー。『クラスメイトとしてよろしくお願ひします』って」

「それにしたって、あなたは私の命を狙っている者なのですから。そうそう気を許してはおられませぬ」

「ウフフ。敵と言っても、それは当分先の話デスよ」

「……どうだか。我々を油断させるための口上じゃないんですか？」  
「ホントデスよ。                    実際、今の私には、それよりもっと重

要なコトがあるのデス」

そう言いながら、スズランにも気取られない程度の僅かな動作で、リーネは視線を教室の後方へ向けた。その瞳の先には、自分の席に座り、東香々美と談笑している

リーネはふつとスズランの方に意識を戻して、

「それに、それだけではないのデス」

「それだけじゃない？ あなたが主に話しかけてきて、私に突っかかってくる理由が、他に何かあるというのですか？」

「ええ、ありマスよ。おおありデス」

リーネは首を少し横に傾け、「ウフフン」と笑いながら、

「あなたは、私の恋敵なのデス」

けるつとした表情で、そう言った。

ちなみに、現在の教室の状況を説明すると、亜紀雄の席が教室の中ほどにあるおかげで、当然のごとくこの会話も部屋の中心で行われている。しかも、現時点で部屋の中にいる生徒はほどよい人数で、周囲はそこまでうるさくもやかましくもなかった。おまけに今のリーネの音量はなかなか大きくて、加えて言うなら他のクラスから遊びに来た生徒まで数人居合わせており

ようは、大多数の生徒に今のセリフを聞かれたのだった。

明日には学年中、そして一週間後くらいには学校中に知れわたっていることだろう。

今のリーネのセリフが、実はスズランが亜紀雄の恋人であることが前提で放たれていることも捨て置きがたい。

「ちょ、あ、あなた！ な、何を言ってますか！」

「ウフフ。言葉の通りデスよ」

というスズランとリーネのわめき合いを聞きながら、亜紀雄はぐたりと机の上に覆いかぶさり、ハアとため息をついた。

『歩くマイナス極』

『死の精霊』

双方共に、人にとつて願い下げな字である。ネガティブでしかない響き。マイナスイメーシな言葉。嫌われ、疎まれるに足る存在。

嫌われ、疎まれる存在でしかない。

しかし、

そんな二人が一緒にいるなら、共に歩いていくなら、どうにかなるかもしれない。どうにでもなるかもしれない。マイナスかけるマイナスがプラスになるように、結果はプラスになるかもしれない。明るいものになるかもしれない。幸せなものになるかもしれない。

スズランと僕が共にいるならば、未来は輝いていく。

亜紀雄はそんなキレイ事で、キレイ事にも似た気休めで、キレイ事に似た戯言で納得しようと思っただけだ。

「あつ、そうデス、アキオ。今日はウチに泊まっていきませんか？

そうしまシヨウ。何なら、私がアキオの背中を流してあげマ」

「主！ こんなのは放っておいて、さつさと帰りましよう！ ……」

……そうだ！ 今日は特別に私が添い寝して、寝物語を読んで差し

上げ

「もう、止めてくれーっ！ 周囲の視線が痛いんだッ！」

『歩くマイナス極』 鞘河亜紀雄は、どっちがプラスでどっちがマイナスなのか、どっちがポジティブでどっちがネガティブなのか、どっちが正で負なのか、もはや分からなくなりながら、見当もつかなくなりながら、それでも困りつつ、戸惑いつつ、笑いつつ、はしやぎつつ、今日から明日へと、現在から未来へと

スズランと一緒に、歩いていく。

スズランとマイナス END

## エピローグ（後書き）

### 後書き

というわけで『スズランとマイナス』でした。

本作は、三人称表現で、過去のキャラを使いつつ、普通のお話を書こうとした物語です。結果的に普通のお話になったのかはよくわかりませんが。元々はもつと薄っぺらい話にするつもりだったので、思ったよりキャラクターが頑張ってくれました。結構気合が必要でした。

次は東リーネを主人公にした作品でも書いてみようとも思っただんですが、先のこととはどうなるか分かりません。それよりもまず連載中小説を、と……。この作品で、式織の三人称表現に関しては、自分評価で一応及第点に届いたかなと思うので、そろそろまた一人称作品に立ち向かおうと思っています。

ともあれ、拙作にお付き合いいただきありがとうございました。また何かの折に再会できればと思います。

### 式織 檻

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8166d/>

---

スズランとマイナス

2009年6月23日10時37分発行